

先インダス文明期からポスト・インダス文明期における 遺跡分布に関する覚書

上杉 彰紀

総合地球環境学研究所

1 はじめに

本稿では、先文明期からポスト文明期（前4千年紀後半から前2千年紀前葉）にかけての遺跡分布の変化を検討する。インダス文明の特徴の一つはその関連遺跡の分布の広さであるが（南北1550km、東西1800km¹⁾）、どういった文明社会の仕組みがそうした広大な遺跡分布を生み出したのか、それは文明期以前の社会とどのように関係するのか、逆に文明が衰退することと遺跡分布の変化はどのように関係しているのか、などの問いがインダス文明の理解にとって大きな鍵となる。

インダス関連遺跡の分布は、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の発見と発掘調査の開始の初期から、研究者にとって関心の的であった。1920年代後半から1930年代にはモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡のみならず、パンジャブ地方東部（Vats 1933）やグジャラート地方（Vats 1937）、さらにはバローチスターン地方（Stein 1929, 1931; Majumdar 1934）でも発掘・分布調査が実施され、インダス関連遺跡が広大な地域に広がっていることが認識されてきた。

インド・パキスタン分離独立後には、発掘調査と並んで遺跡分布調査が精力的に進められ、各地で数多くの遺跡が発見されることとなった（インド側の分布調査については *Indian Archaeology - A Review*、パキスタン側については *Pakistan Archaeology* の各号を参照されたい。また M.R. Mughal によるチョーリスターン地方のハークラー川涸河床の分布調査（Mughal 1997 ほか）も重要である）。

J.P. Joshi らによるインド側の遺跡集成（Joshi *et al.* 1984）はそうした盛んに行われてきた遺跡分布調査の成果を総合したものであり、添付された地図とともに、インダス関連遺跡の分布研究の基礎となるものであった²⁾。それをさらに拡大したのが G. Posschl による集成で、アフガニスタン、パキスタン、インドの遺跡が網羅されている（Posschl 1999）。そこで挙げられた遺跡数は2502遺跡を数える。さらにその後も、地域に根ざした研究者の活動によって、より詳細なデータセットが整備されつつある（Mallah 2007, 2009; Manmohan Kumar 2009; Dangi 2009a, 2009b, 2010 など）。

こうした遺跡集成がインダス遺跡の分布の理解にきわめて重要な役割を果たすことはいうまでもないところであるが、発掘遺跡が全体の約4%にすぎないことを勘案すると（上杉 2010）、遺跡分布を読み解く上で多くの制約が存在することに気づく。遺跡分布調査では遺跡の位置情報だけでなく、表面散布遺物の記録や遺跡範囲の計測が行われるが、実際に遺跡の範囲として認識されるのは、遺跡利用時から廃絶後にかけて形成された遺丘の範囲あるいは遺物の散布範

囲であって、そこに異なる時期の遺跡範囲を読み取ることは決して容易でない。また、遺物の帰属層位に関する情報は試掘調査が行われないうちで得られないため、遺跡の存続期間の推定にも当然誤認もしくは誤差が生じることになる。分布調査で得られた資料に年代を与えるためには、発掘出土資料による地域編年の確立が不可欠である。

こうした時期や規模など、遺跡の理解にとって不可欠な情報がない状態では、結果的に分布が確認された遺跡（群）の性格を理解することは不可能となる。遺跡の規模を手がかりに間接的に遺跡の性格を推定することが一般的に行われているが³⁾、上記の要因を含めてさまざまな制約があることはいうまでもない。

性格が不明な遺跡が地図上に位置づけられると、それらは地図上の点としてすべて等価的な扱いを受けることになってしまう。結果的に、遺跡分布が意味するところを読み解くことは難しくなる。例えば「遺跡数の多さ＝当時の社会の中心地」、逆にいえば「遺跡数の少なさ＝辺境」という解釈がなされることがあるが、これもまた遺跡分布調査がもつ制約から生まれた誤解であることが少なくない。

遺跡の分布を読み解くには、単に点の分布としてではなく、点にさまざまな情報を付与し、多角的に検討することが求められるが、その作業は決して容易ではないし、分布の検討から導きだされた結論が発掘調査によって覆されることも当然のことながらある。あるいはさらなる分布調査によって、それまで遺跡が少なかったところで多くの遺跡が発見される可能性もあれば、遺跡の少ない地域が必ずしも当時の集落分布を反映しているわけではないこともある⁴⁾。こうした制約を、遺跡の点に付加情報を与えることによって減らしていくことが重要である。

一方、近年の調査・分析技術の飛躍的向上は、分布を読み解くための新たな視角と手法を提供しつつある。GPSによる空間情報の取得や諸々のデジタルデータのGISによる統合的分析は、先に述べた分布の多角的検討を可能にするものであり、インダス考古学研究においても試みがなされている（Teramura and Uno 2006; Teramura *et al.* 2008; 長田・寺村・宇野 2010）。10年前には一般には不可能であった分析が可能となりつつある。

本稿は、こうした分布論のもつさまざまな制約と新たな分析技術の導入をふまえながら、インダス文明の盛衰過程において遺跡分布が意味するところを、どのように理解できるか模索することが目的である。現有データを以下に利用することができるか、その可能性と制約、そして今後の課題について考えてみたい。

2 本稿で用いるデータセット

まず、本稿で用いた遺跡のデータは、(Possehl 1999) の遺跡リストに、インド・ハリヤーナー州域の遺跡については (Manmohan Kumar 2009) および (Dangi 2010)、インド・パンジャーブ州については (Bala 1992)、パキスタン・シンド州については (Mallah 2007) のデータをそれぞれ加えたものである。遺跡の位置情報については GPS で取得されたデータ (Dangi 2010 および Mallah 2007) を優先的に採用した。ちなみに、(Possehl 1999) には 2502 遺跡、(Manmohan Kumar 2009) には 937 遺跡、(Bala 1992) には 342 遺跡、(Dangi 2010) には 454 遺跡、(Mallah 2007) には 158 遺跡がおさめられており、これらを統合して、3670 遺跡からなるデータセットを作成した。本稿の分析はこのデータセットに基づいたものである。

3 地域区分

次に、本稿での分析にあたって用いた地域分類および時期分類について述べておこう（図1）。

地域をいかに区分するかによって、地域別の遺跡数の比較の結果に大きな違いが生じることはいうまでもないところである。地形、水系、文化、さまざまな地域分類が可能であるが、いずれにも一長一短があり、設定した地域ごとに含まれる遺跡数に大きな影響を与えることになる。地形区分自体になんらかの意味をもたせるのであれば厳密な検討が必要であるが、本稿は遺跡分布の全体的傾向を示すのが目的であるので、あくまでも空間分類の目安として、以下のように現在の行政区分をもとに地域を設定することとした。なお、行政区分が部分的にせよ地形と文化を考慮したものであることから、ここでの分類にもそうした行政区分の背景が反映されている。

- 1) バローチスターン州、ハイバル・パフトゥーンフワ州（旧北西辺境州）南部
→バローチスターン地方
- 2) シンド州
→シンド地方
- 3) パンジャーブ州（パキスタン）
→パンジャーブ地方
- 4) パンジャーブ州（インド）、ハリヤーナー州、ラージャスターン州北部
→ガッガル地方
- 5) グジャラート州
→グジャラート地方
- 6) ラージャスターン州南部
→アラヴァリー地方
- 7) ハイバル・パフトゥーンフワ州北部、ジャンムー＝カシュミール州
→ヒマーラヤ地方

この地域区分と大まかな地形との関係について述べておくと、バローチスターン地方は一部に標高 100m 以下の低地を含むが、その主体をなすのは標高 200～3000m 以上の高地である。遺跡は山間の盆地あるいは細長く伸びる低地に分布する。中央部から北西に向かってはアフガニスタン南部のカンダハール地方に通じ、南東にはシンド地方の沖積平野へと通じる。北東部では、ジョーブ地方からゴーマル地方を経てインダス平原に通じ、逆にバンヌー地方から北のワジーリスターン方面にもつながっている。また、南部のマクラーン地方はアラビア海を介してアラビア半島にも近接している。

シンド地方は、西縁にバローチスターン高原へと通じる標高 200m 以上に及ぶ高地（キルタル山脈）を含むが、中心をなすのは 100m 以下の低地によって特徴づけられる地域である。中央をインダス川、東側にナーラー川が流下している。インダス川とナーラー川の間にはローフリー丘陵があり、良質のチャート（フリント）が産出する。この石材は旧石器時代からインダス文明期にかけて石器の材料として広く使用されたことが知られている。ナーラー川の東には広大なタール砂漠が広がっている。

パンジャーブ地方はインダス川、ジェーラム川、チェーナーブ川、ラーヴィー川、ベアース川、サトルージ川が形成する標高 100m 以下から 300m の沖積平野に相当する。北西部にはソルト山脈を挟んでポトワール盆地、さらにはペシャーワール盆地が位置する。その先はヒマーラヤ山脈へとつながっている。また、南西部はハークラー川の潤河床沿いのチョーリスターン地

方である。インダス川とハークラー川を通じて、南西にはシンド地方、北東にはガッガル地方につながるほか、西にはゴーマル地方を介して、バローチスタン地方に通じている。

ガッガル地方は標高 100～300m の平原地域で、ガッガル川とチョウタング川およびその支流がシワーリク地域から南西方向にこの地域に流下している。北はサトルージ川、東はヤムナー川によって区切られる。西はチョーリスターン地方との地形的境界はなく区分がむずかしいが、ここでは恣意的にインドとパキスタンの国境を境とした⁵⁾。西はパンジャブ地方、東はガンガー地方、北はヒマーラヤ山脈、南はアラヴァリー山脈に接している。

ガンガー地方は、ヒマーラヤ山脈から南東に向かって流下するガンガー川およびヤムナー川とその支流によって形成された沖積平野である。標高 100～300m の範囲が含まれる。水系が異なるものの、地域的には西のガッガル地方に連続している。

アラヴァリー地方は標高 300～800m に及ぶ高地帯である。西はタール砂漠によって画されるが、北はガッガル地方、東はガンガー地方、南はグジャラート地方に通じている。さまざまな石材・鉱物資源に豊富な地域である。

グジャラート地方は、湿原によって画される西部のカッチ地方、標高 200～400m の高地を含む南部のサウラーシュトラ半島、アラヴァリー山脈とカッチ湿原によって挟まれる低地からなる北部地域、ヴィンディヤ山脈あるいはサヒアードリー山脈に続く低地を含む東部地域に分かれている。瑪瑙や碧玉など各種石材の産地が点在する。北はアラヴァリー地方、西はシンド地方、東はインド半東部、さらにはアラビア海を介して西方にも通じる。

4 時期区分

次に時間軸について整理しておく。(Possehl 1999) では、遺跡ごとにそこで確認されている文化要素（主に時間幅が限定される特徴的な土器）が記されているものがある。(Manmohan Kumar 2009)、(Dangi 2010)、(Bala 1992)、(Mallah 2007) は先文明期、文明期、ポスト文明期の原則 3 時期区分を用いている。そこで、まず (Possehl 1999) の遺跡を筆者の判断で、先文明期、文明期、ポスト文明期に編成しなおし、先文明期はさらに前 4 千年紀後半と前 3 千年紀前葉に分け、計 4 時期を分析の時間軸として設定した。本稿では、前 3 千年紀前葉以前を先文明期、前 3 千年紀中・後葉を文明期、前 2 千年紀前葉をポスト文明期としたが、この対応関係はあくまでも大まかな目安であり、今後の編年研究によって変更される部分があることを明記しておく。土器を基軸とした相対編年の充実と ¹⁴C 年代の組み合わせによる編年研究は、遺跡分布研究においてきわめて重要な研究課題である。

(Possehl 1999) の文化要素と筆者による 4 時期区分の対応関係は以下のとおりである。なお、(Possehl 1999) のリストで採集遺物に関する記載がない例が 79 遺跡あり、それらは本稿の分析からは除外する。

【先文明期 1 (前 4 千年紀後半)】

トガウ式土器、アンジラ式土器、ダシュト式土器、シャーヒー・トゥンプ式土器、ケーチ・ベীগ式土器、アムリー＝ナル式土器、ハークラー式土器、アナルタ式土器

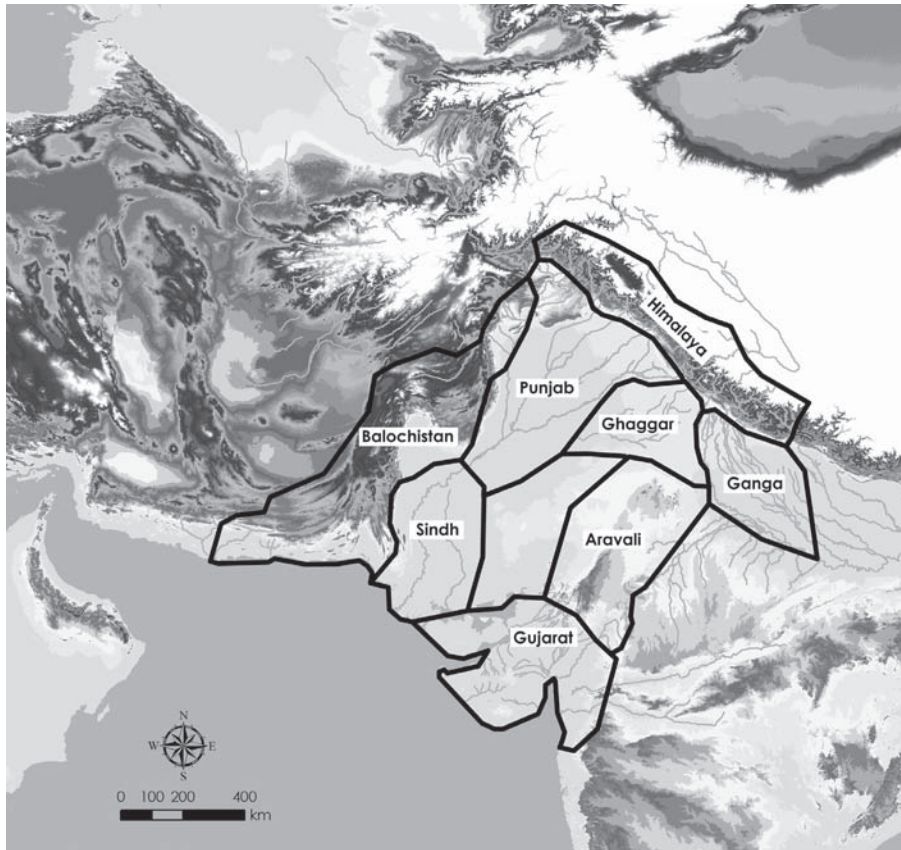


図1 地域区分図

【先文明期 2（前 3 千年紀前葉）】

ダンプ・サダート式土器、クエッタ式土器、コート・ディジー式土器（Late Kot Diji と記載されたものも含む）、ソーティ=シースワール式土器

【文明期（前 3 千年紀中・後葉）】

ハラッパー式土器、ソーラト・ハラッパー式土器（Late Sorath と記載されたものも含む）、クッリ式土器（Late Kulli と記載されたものも含む）、BMAC

【ポスト文明期（前 2 千年紀前葉）】

ジューカル式土器、ジャンガル式土器、トリフニー式土器、H 墓地式土器、バーラー式土器、赭色土器、輝赤色土器

以上のかたちで時期を設定したが、いくつかの問題があるので記しておく。まず、根本的な問題として、これまでに確認されてきた遺跡で採集された資料の大部分が未報告であるということがある。ほとんどの遺跡が、採集遺物の視覚的資料（実測図あるいは写真）を伴わない、簡単な記載による報告である。結果的に採集遺物にもとづいた時期判定は難しく、誤認のみならず、研究の進展によってかつての理解が大きく変わっているところもあるため、数十年前の報告を現在の研究レベルに正確に投影できるかどうか判然としない。つまり、Possehl のリストに記された文化要素を検証する手段が存在しない状況にある。したがって、本稿で用いたデータセットはあくまでも暫定的なものであり、今後の研究によって変更が生じる可能性を認識し

ておく必要がある。

同様の問題として、文化要素の帰属時期についても十分に理解が進んでいないところがある。具体的に述べると、グジャラート地方のアナルタ式土器については、前4千年紀から前3千年紀にかけて展開したことが若干の¹⁴C年代測定値によって知られているが（Patel 2008）、その型式学的変化は明らかになっておらず、現状ではアナルタ式土器を前4千年紀後半と前3千年紀後半に分けることができない。そこで、アナルタ式土器が報告されている遺跡については、すべて前4千年紀後半と前3千年紀前葉の双方に存在した遺跡としてリストを作成している。

同じく、ガッガル地方のソーティ=シースワール式土器については、先文明期の前3千年紀前葉から文明期にかけて展開したことが知られているが、資料にもとづいて前3千年紀前葉と前3千年紀中・後葉に分類することは難しい状況にある。（Manmohan Kumar 2009）と（Dangi 2010）においては、ソーティ=シースワール式土器を前3千年紀前葉の遺跡として記載しているが、その中には文明期の遺跡も含まれている可能性が高い。ガッガル地方における前3千年紀前葉と前3千年紀中・後葉の遺跡数を検討する際には、この点を認識しておく必要がある。

また、データセットの中には遺跡の空間情報が得られない例がある。580遺跡が所在地域はわかるものの、緯度・経度情報がなく、地域別の検討においては利用可能であるが、GISによる遺跡分布図には反映できない。緯度・経度情報は遺跡分布の空間分析に不可欠なデータであり、今後いかに空間情報の特定を進めていくか、大きな課題である。

5 各時期の遺跡数の推移

まず、先文明期からポスト文明期にかけての遺跡数の推移について検討する（図2～6、表1・2）。

全体でみると（図2）、前4千年紀後半には464遺跡、前3千年紀前葉には819遺跡、前3千年紀中・後葉には1244遺跡、前2千年紀前葉には1660遺跡で一貫して増加傾向にある（表1）。増加率は前4千年紀後半-前3千年紀前葉が173%、前3千年紀前葉-前3千年紀中・後葉が152%、前3千年紀中・後葉-前2千年紀前葉が134%である。全体でみるかぎり、いずれの時期においても遺跡数の減少がみられないことは重要である。

ところが、これを時期別にみていくと、地域ごとに大きな変化のあることがわかる（表1）。カンダハール地域、ヒマーラヤ山間地域、インド半島部北部はそもそも総数が少ないのであまりはつきりとしませんが、バローチスターン地方、シンド地方、パンジャブ地方、ガッガル地方では変化が明瞭である。

地域別にみていくにあたり、遺跡数の増減と人口移動パターンとの関係について整理しておくことにしよう。まず、遺跡数が異なる時期にまたがって安定している場合、人口の移動はなく安定しているものとみなす。もちろんこの場合でも、遺跡内部で人口が増加している可能性は十分にあり、遺跡規模の変化によってそうした可能性を検討することができるが、ここでは遺跡数による検討であるので、ここではその可能性については考えない。

遺跡が減少する場合、すなわち一定数の遺跡が廃絶する場合を考えると、周辺で新規に出現する遺跡が存在するならば、廃絶遺跡から新規遺跡への人口移動を推定することができる。逆に廃絶遺跡の周辺で新規遺跡が存在しないならば、遠隔地への移動の可能性を考える必要があ

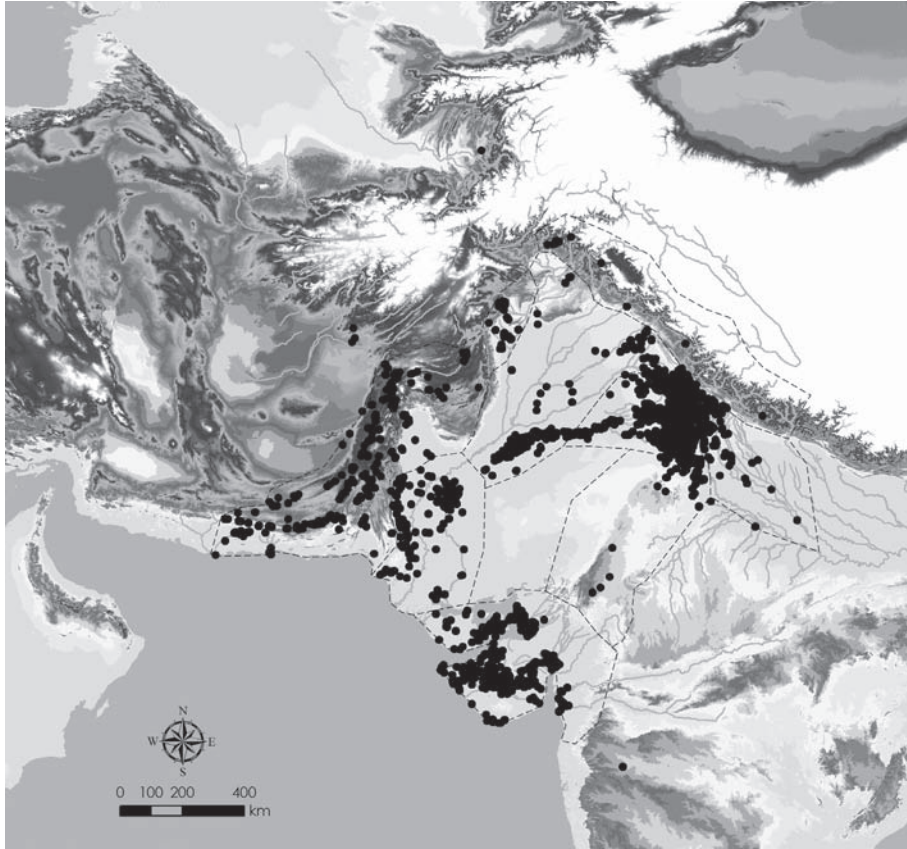


図2 前4千年紀後半～前2千年紀前葉 遺跡全体分布図

る。廃絶遺跡よりも周辺での新規遺跡の数が多い場合には廃絶遺跡からの分散が推定される。この前提に立つと、ある地域で遺跡数が大きく減少し、別の地域で遺跡数が大きく増加する場合には、地域を越えた人口移動が推定されることになる。遺跡数が減少せずに増加する場合には、人口の増加による分散の可能性が考えられる。

以下の検討では、上記の前提のもとで、先行時期から居住が継続する遺跡、廃絶する遺跡、そして新規に出現する遺跡をカウントし、地域内での移動と地域外への移動について把握することを試みる。また、遺跡間距離は緯度・経度情報のある遺跡を Arc GIS で DEM 上にマッピングしたのち、遺跡間を結ぶ Tin を発生させ、その距離を計測したものである。面積は遺跡を結んだ外形線内部の面積、密度はその中に含まれる遺跡数を面積で割って算出している。なお、アラヴァリー地方、ヒマラーヤ地方、インド半東部については遺跡数が全体的にきわめて少ないことから、遺跡間距離、面積、密度の検討は行っていない。また、ガンガー地方については全2千年紀前葉のみを示した。

【バローチスターン地方】

バローチスターン地方は前4千年紀後半から前3千年紀前葉においては他地域の遺跡数をはるかに上回る遺跡稠密地帯であるが（前4千年紀後半 243 遺跡、前3千年紀前葉 187 遺跡）、前3千年紀中・後葉に遺跡数が増加することはなく、むしろ減少傾向にある（135 遺跡）。それが前2千年紀前葉には2遺跡のみと著しく減少してしまう。

これを継続遺跡、新規遺跡、廃絶遺跡についてみると、前4千年紀後半から前3千年紀前葉にかけて継続する遺跡が多く（158 遺跡）、同一遺跡の継続利用が特徴といえる。ただし、廃

表 1 インダス地域における遺跡数

【全体】

	カンダハール	バローチスタン	シンド地方	ハンジャール地方	グジャラート地方	ガッガル	アラヴァリー	ガンガー	ヒマラーヤ	インド半島部	計
総遺跡数	3	330	222	411	584	1795	55	216	4	1	3621
前 4 千年紀後半	1	243	47	105	44	23	1	0	0	0	464
前 3 千年紀前葉	3	187	107	69	49	396	3	1	4	0	819
前 3 千年紀中・後葉	0	135	148	191	429	285	10	45	1	0	1244
前 2 千年紀前葉	2	2	22	69	164	1173	43	184	0	1	1660

【継続遺跡】

前 3 千年紀前葉	1	158	47	6	44	23	0	0	0	0	279
前 3 千年紀中・後葉	0	75	45	8	11	156	3	1	1	0	300
前 2 千年紀前葉	0	2	11	5	47	140	3	36	0	0	244

【新規遺跡】

前 3 千年紀前葉	2	29	60	63	5	373	3	1	4	0	540
前 3 千年紀中・後葉	0	60	103	183	418	129	7	44	0	0	944
前 2 千年紀前葉	2	0	11	64	117	1033	40	148	2	1	1418

【廃絶遺跡】

前 3 千年紀前葉	0	-85	-1	-99	0	0	-1	0	0	0	-185
前 3 千年紀中・後葉	-3	-112	-62	-61	-38	-240	0	0	-3	0	-519
前 2 千年紀前葉	0	-133	-137	-186	-382	-145	-7	-9	-1	0	-1000

絶する遺跡が 85 遺跡あり、新規遺跡（29 遺跡）を差し引いても、遺跡数の減少を引き起こしている。前 3 千年紀中・後葉になると、継続遺跡が 75 遺跡、新規遺跡が 60 遺跡、廃絶する遺跡が 112 遺跡であり、廃絶した遺跡から継続遺跡もしくは新規遺跡への人口の移動が推定される。地域外への人口移動の可能性もある。前 2 千年紀前葉には継続遺跡が 2 遺跡、新規遺跡が 0 遺跡、廃絶する遺跡が 133 遺跡となっており、地域外への人口の大規模な移動が生じている可能性が高い。

これを遺跡間距離でみると、前 4 千年紀後半から前 3 千年紀後葉にかけてはほとんど変化がなく、平均 54km である。遺跡分布範囲は平均 282,000km²、遺跡密度は 0.0006 で、全体としては遺跡数が多いが、バローチスタン地方として分類した地域の面積が大きいことから、遺跡距離、密度でみると、他地域よりも遺跡分布は稀薄である。

表 2 遺跡間距離・面積・密度

	パロチスターン	シンド	パンジャブ	グジャラート	ガッガル	ガンガー
遺跡間距離 (km)						
前 4 千年紀後半	49	39	18	26	51	-
前 3 千年紀前葉	55	25	45	23	17	-
前 3 千年紀中・後葉	57	37	14	24	25	-
前 2 千年紀前葉	0	74	17	32	10	21
面積 (square km)						
前 4 千年紀後半	304000	30000	33000	26000	22000	-
前 3 千年紀前葉	310000	54000	114000	26000	108000	-
前 3 千年紀中・後葉	234000	182000	36000	114000	113000	-
前 2 千年紀前葉	0	56000	12000	98000	145000	86000
密度 (no/square km)						
前 4 千年紀後半	0.0008	0.0016	0.0032	0.0018	0.0010	-
前 3 千年紀前葉	0.0006	0.0020	0.0006	0.0020	0.0037	-
前 3 千年紀中・後葉	0.0006	0.0008	0.0052	0.0038	0.0025	-
前 2 千年紀前葉	0	0.0004	0.0047	0.0017	0.0082	0.0021

【シンド地方】

シンド地方では前 4 千年紀後半から前 3 千年紀中・後葉にかけて遺跡数は増加するが（前 4 千年紀後半 47 遺跡、前 3 千年紀前葉 107 遺跡、前 3 千年紀中・後葉 148 遺跡）、前 2 千年紀前葉には激減する（22 遺跡）。

これを継続遺跡、新規遺跡、廃絶遺跡についてみると、前 3 千年紀前葉において新規遺跡数が顕著である（60 遺跡）。廃絶する遺跡はわずかに 1 遺跡であり、人口増加もしくは他地域からの人口移入が生じている可能性を示している。前 3 千年紀中・後葉においても新規遺跡が目立つ（103 遺跡）。その一方で、廃絶する遺跡が 62 遺跡で、新規遺跡数は地域内での廃絶した遺跡からの人口の移動もしくは地域外からの人口の移入を反映している可能性がある。前 2 千年紀前葉になると、継続遺跡と新規遺跡がともに 11 遺跡であるが、廃絶する遺跡が 137 遺跡もあり、地域内での人口移動では説明できず、大規模な人口移動が生じている可能性が高い。

遺跡間距離でみると、前 4 千年紀後半から前 3 千年紀後葉までは平均 34km であるが、前 2 千年紀前葉になると、74km となる。面積では、前 3 千年紀中・後葉に遺跡分布範囲が著しく拡大しており（前 3 千年紀前葉に比較して 337% の増加率）、遺跡数の増加率（138%）を大きく上回っている。密度でみると、逆に分布面積の拡大によって密度が低下するという傾向が認められる。

【パンジャブ地方】

パンジャブ地方では前 4 千年紀後半から前 3 千年紀前葉に遺跡数は減少し（前 4 千年紀後半 105 遺跡、前 3 千年紀前葉 69 遺跡）、前 3 千年紀中・後葉になって急増する（191 遺跡）。ところが、前 2 千年紀前葉になると、69 遺跡に急減する。

前 4 千年紀後半に存在した 105 遺跡のうち、前 3 千年紀前葉に続く遺跡はわずかに 6 遺跡で

あり、99 遺跡が廃絶している。地域外への人口移出か、もしくは新規遺跡（63 遺跡）への人口分散を示していると考えられる。前3千年紀中・後葉になると、新規遺跡数が急増しており（183 遺跡）、廃絶遺跡が61 であることから、地域外からの人口の移入もしくは地域内での分散が推定される。人口増加の可能性もある。前2千年紀前葉には廃絶遺跡がきわめて多く（186 遺跡）、新規遺跡 64 遺跡を含めても地域外への人口移動の可能性が高いといえるであろう。

遺跡間距離でみると、前3千年紀前葉に 45km と距離は増大しているが、前2千年紀前葉を含めてほかの時期は平均 16km で安定している。面積でみると、前3千年紀前葉が最も大きく（114,000km²）、前2千年紀には最も小さくなる（12,000km²）。密度では前3千年紀前葉に 0.0006 と小さいが、ほかの時期は比較的安定しており、遺跡分布範囲の増減がこの地域の特徴となっている。

【グジャラート地方】

グジャラート地方では先文明期には遺跡数が限られていたが（前4千年紀後半 44 遺跡、前3千年紀前葉 49 遺跡）、前3千年紀中・後葉に遺跡数が急増し（429 遺跡）、前2千年紀前葉には激減する（164 遺跡）。ただし、遺跡数は比較的多い。

グジャラート地方では、前4千年紀と前3千年紀前葉の区分が難しいが、前3千年紀前葉に5 遺跡増えるのは、シンド系土器の出土遺跡である。前3千年紀中・後葉になると、遺跡数が急増しており、ハラッパー文化およびソーラト・ハラッパー文化の遺跡が広く分布することによる。前2千年紀前葉には遺跡数が急減しており、地域外への人口の移出の可能性が考えられる。ただし新規遺跡 117 と継続遺跡 47 を足した 164 遺跡が存在しており、バローチスターン地方やシンド地方における状況とは様相を異にしている。

遺跡間距離は他地域に比較して最も安定しており、平均距離は 24km である。面積でみると、前3千年紀中・後葉に著しく拡大しており（前3千年紀前葉からの増加率は 438%）、前2千年紀前葉にも分布面積は大きい。密度でみると、前3千年紀中・後葉には面積が拡大しているものの、その増加率以上に遺跡数が増加しているため、高い密度を示す（0.0038）。

【ガッガル地方】

ソーティ＝シースワール式土器の帰属時期の特定に問題があることから前3千年紀前葉と前3千年紀中・後葉の遺跡数を断定することが難しいが、大局的にみれば前3千年紀前葉から前3千年紀中・後葉に遺跡数が急増している様子を見ることができている。前3千年紀前葉から前3千年紀中・後葉にかけてのある段階で地域内での急激な人口増加か、あるいは地域外からの人口の移入が生じている可能性がきわめて高い。前2千年紀前葉には新規遺跡が1033 遺跡であり、地域内における人口増加か、もしくは他地域からの人口移入、あるいは地域内における人口の分散が生じた結果と考えられる。

遺跡間距離をみると、前4千年紀後半が 51km と大きいですが、前3千年紀前葉から前2千年紀前葉には平均 17km ときわめて近接した位置に遺跡が分布する。面積は一貫して拡大傾向にあり、前2千年紀前葉には 144,000km²、密度はハラッパー文化の要素が確認されている遺跡だけをみると若干落ちるが、それでも他地域に比較して高い密度を示している（前3千年紀前葉から前2千年紀前葉における平均は 0.0048）。

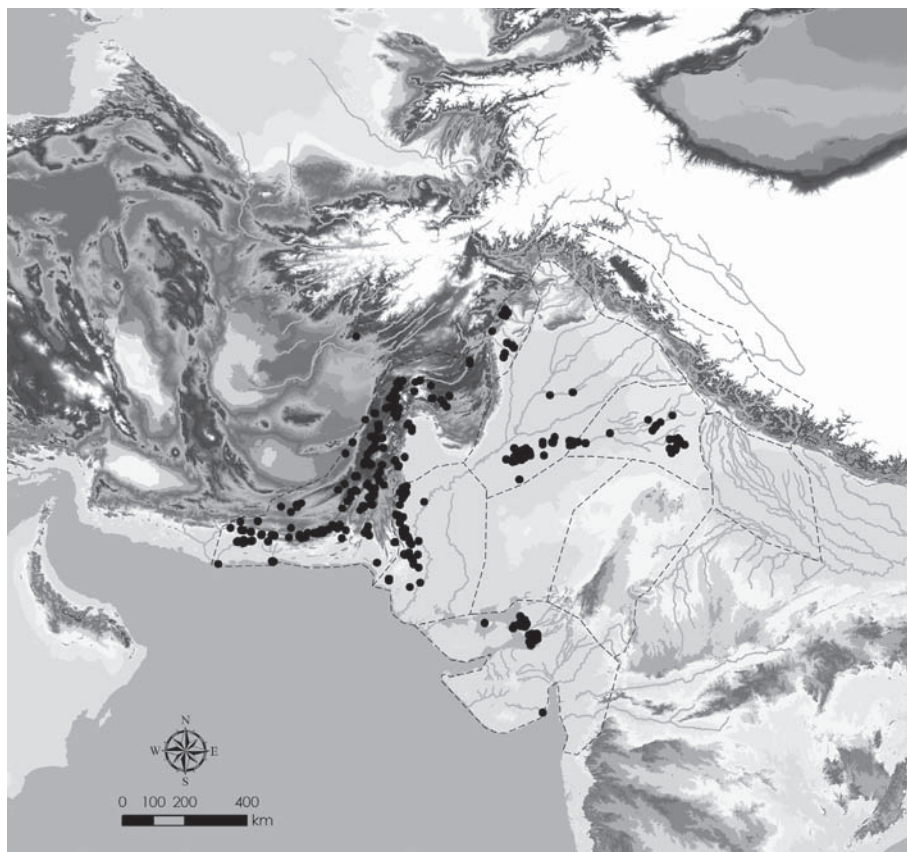


図3 前4千年紀後半における遺跡分布

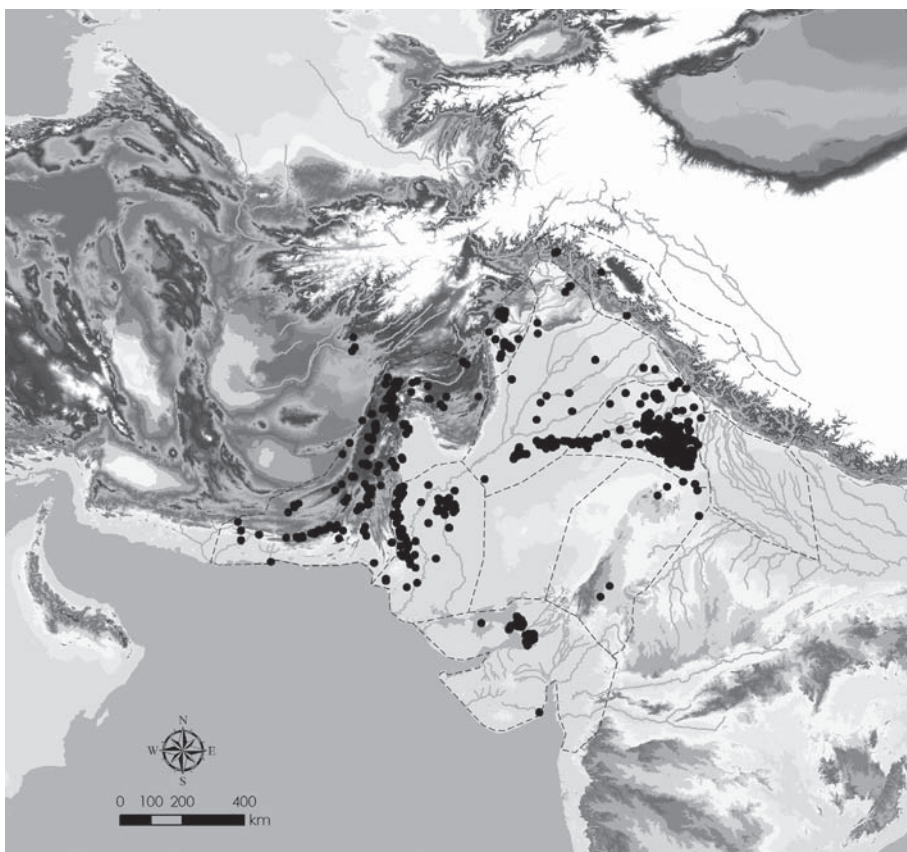


図4 前3千年紀前葉における遺跡分布

【アラヴァリー地方】

アラヴァリー地方でも似たような傾向があり、前2千年紀前葉に遺跡数が増加する。前4千年紀後半から前3千年紀中・後葉にかけての遺跡が少なく、分布調査が十分でない可能性もあるが、山間地であることを考慮すると、平原部と異なる遺跡分布の様相を反映している可能性も考える必要がある。前2千年紀前葉に新規遺跡が増加しており、地域外からの人口の移入の結果であろうか。

【ガンガー地方】

ガンガー地方も同様で、前3千年紀中・後葉から前2千年紀前葉に多い。先文明期の遺跡がきわめて少ないが、この時期の文化内容が明らかになっていないことによる可能性がある。前3千年紀中・後葉には遺跡が増加し、前2千年紀前葉には新規遺跡の増加による遺跡数が急増しており、地域外からの人口移入による可能性が高いが、東のガッガル地方での遺跡数の増加と連動した現象と考えられる。

前2千年紀前葉に限って、遺跡間距離をみると21km、面積は86,000km²、密度は0.0021で、ガッガル地方ほどではないものの、大きな面積で密度の高い分布が認められる。

こうした状況を有意のものとして捉えるならば、前4千年紀後半の段階ではバローチスターン地方およびパンジャブ地方に多くの遺跡が分布するが、前3千年紀前葉になると、バローチスターン地方およびパンジャブ地方で遺跡数が減少する一方、シンド地方では遺跡数の増加が認められる。ガッガル平原ではこの時期に遺跡数の増加が始まっている可能性が高い。その他の地域では、遺跡数が限られている。

前3千年紀中・後葉になると、バローチスターン地方では遺跡数が若干減少しているが、シンド地方、パンジャブ地方、ガッガル地方、グジャラート地方では遺跡数が大きく増加している。この背景には各地ともに新規遺跡の増加があるが、地域外からの移入のみが原因ではないことは近隣地域が等しく増加していることから明らかである。地域内での人口増加もしくは人口分散が生じている可能性を重視する必要がある。

前2千年紀前葉には、バローチスターン地方、シンド地方、パンジャブ地方、グジャラート地方の各地で遺跡数の減少が生じている。逆にガッガル地方とガンガー地方では顕著な遺跡数の増加があり、減少地域からの人口移入と地域内での人口分散が生じている可能性が高い。

このように、前4千年紀後半から前2千年紀前葉にかけて通時的にみると、各地で遺跡数の顕著な増減があり、地域内での分散、地域外への移出、地域外からの移入など、さまざまな現象が生じていることが推定される。こうした状況が地域間の交流や地域社会の様態とどのように関わっているか検討することが、文明社会の盛衰の過程を考える上で大きな手がかりの一つとなる。

6 文明期における都市遺跡周辺における遺跡分布の分析

次に、視点を変えて、前3千年紀中・後葉における都市遺跡とその周辺における遺跡分布のあり方について検討することにしよう。

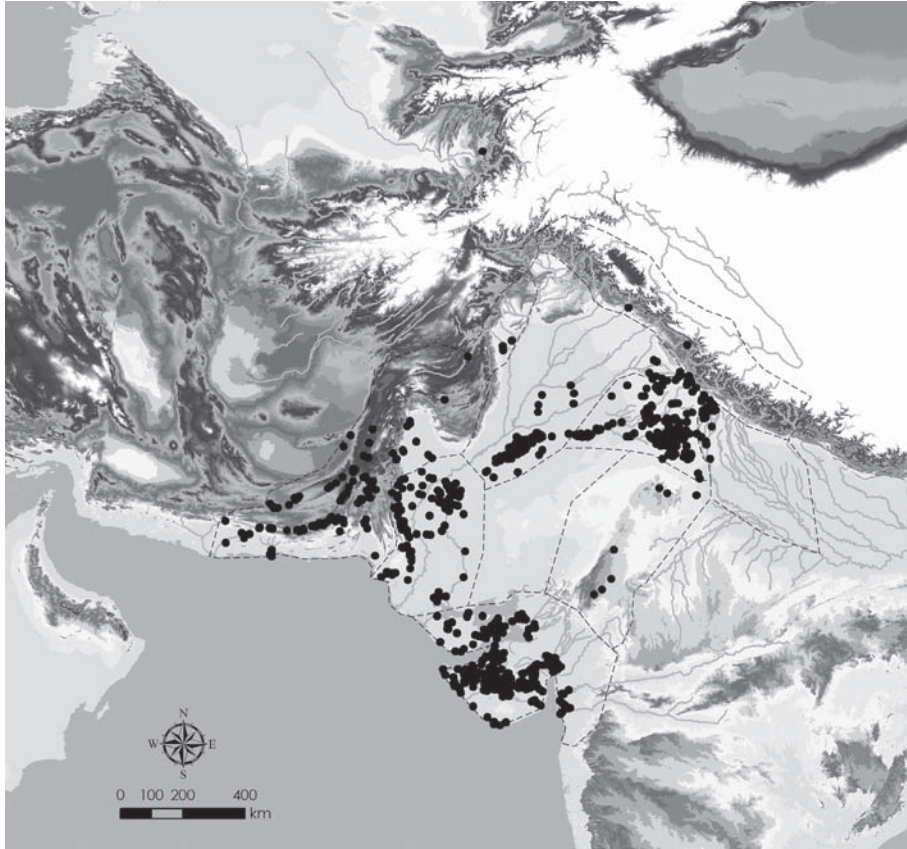


図5 前3千年紀中葉～後葉における遺跡分布

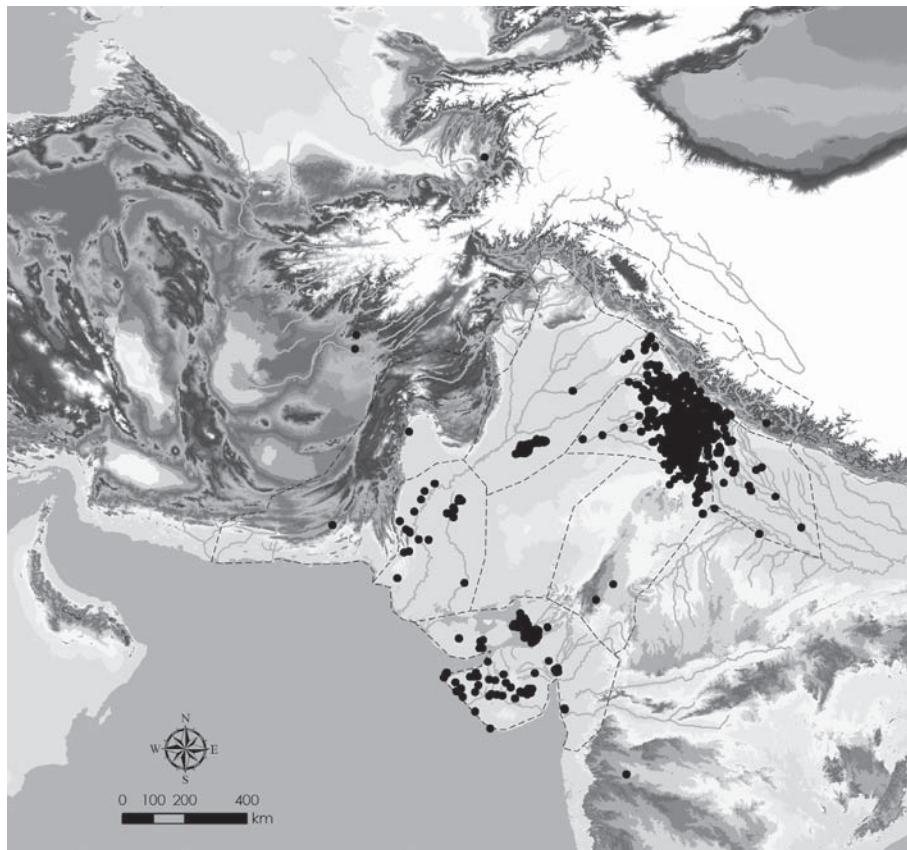


図6 前2千年紀前葉における遺跡分布

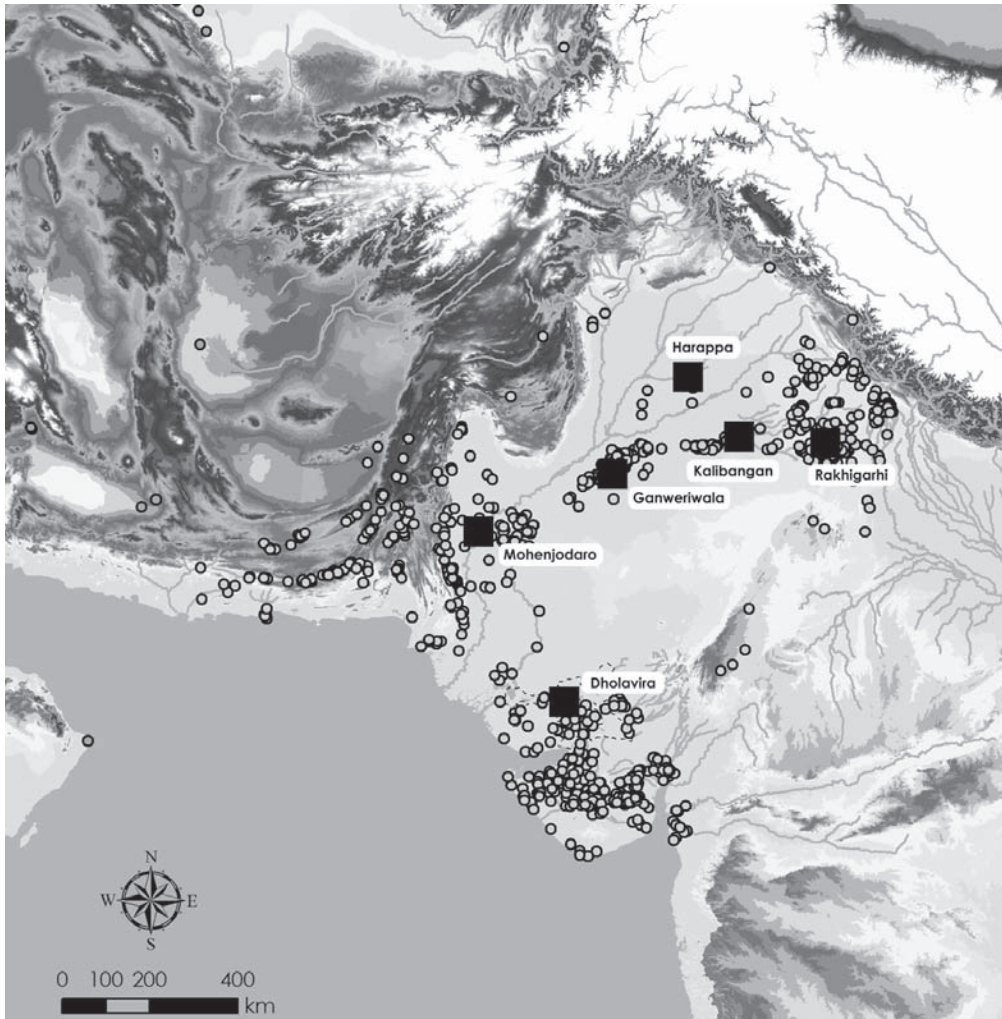


図7 文明期における都市遺跡の分布

インダス文明を代表する都市遺跡としては、シンド地方のモヘンジョダロ遺跡（約 100ha）、パンジャブ地方のハラッパー遺跡（約 70ha）とガンウェリワラー遺跡（約 30ha）、グジャラート地方のドーラーヴィーラー遺跡（約 36ha）、ガッガル地方のカーリーバンガン遺跡（約 17ha）とラーキーガリー遺跡（50ha 以上）が代表的なものとして知られる（図7）。このほかにも交易や工芸品生産などを担う地域の拠点として考えられる遺跡が存在している（ロータル遺跡、バガーサラー遺跡、バナワーリー遺跡など）。こうした都市および拠点集落が結節点となって文明期の都市社会の社会的ネットワークを構成していたと推定される。

ここではモヘンジョダロ遺跡、ハラッパー遺跡、ドーラーヴィーラー遺跡、ラーキーガリー遺跡を取り上げ、前4千年紀後半から前2千年紀前葉にかけての周辺における遺跡分布を検討する（図8～11、表3・4）。これらの都市遺跡は先文明期終末の前2800年ごろから都市的拠点として発展し、前2000年頃から前1900年頃までに衰退したと考えられるが、そうした都市の盛衰は周辺の中小規模集落と関連をもちながら展開したことが想定され、都市と中小集落の関係を考察する必要がある。先の検討で文明期に各地で遺跡数が増加する現象を確認したとおりである。

各地における都市の成立がそれ以前の地域的重要性を基盤としたものであるのか、都市が成立し地域的重要性が増大することによってその地域の構造が変化したのか、すなわち遺跡分布

表 3 各都市遺跡周辺（半径 100km 圏内）における遺跡数

※遺跡数には都市遺跡も含む。

	モヘンジョダロ	ハラッパー	ドーラーヴィーラー	ラーキーガリー
遺跡総数	96	5	47	1050
前 4 千年紀後半	14	2	8	19
前 3 千年紀前葉	57	4	9	313
前 3 千年紀中・後葉	62	4	33	167
前 2 千年紀前葉	6	1	10	721

表 4 各都市遺跡周辺（半径 100km 圏内）における継続遺跡・新規遺跡・廃絶遺跡

※遺跡数には都市遺跡も含む。

	継続遺跡	新規遺跡	廃絶遺跡
モヘンジョダロ			
前 3 千年紀前葉	14	43	0
前 3 千年紀中・後葉	25	37	32
前 2 千年紀前葉	4	2	58
ハラッパー			
前 3 千年紀前葉	2	2	0
前 3 千年紀中・後葉	3	1	1
前 2 千年紀前葉	1	0	3
ドーラーヴィーラー			
前 3 千年紀前葉	?	?	?
前 3 千年紀中・後葉	3	30	6
前 2 千年紀前葉	2	8	31
ラーキーガリー			
前 3 千年紀前葉	?	?	?
前 3 千年紀中・後葉	?	?	?
前 2 千年紀前葉	108	613	59

の脈絡で換言すれば、都市出現以前にその地域に多くの遺跡が分布したのか、それとも遺跡分布が稀薄であった地域に都市が「突如」として出現したのか、という問いがここでの視点である。都市の自然発生的観点からすれば、都市出現以前からその地域での開発が進んでいる必要があるであろうし、逆に都市をある種の政治的産物として「突如」として出現する可能性をみるならば、諸々の戦略的目的からそれまで開発が進んでいなかった地域に都市が建設される状況が想定されることになる。いずれにせよ、都市は先の遺跡分布の意味を考える上でも重要な手掛かりの一つであることはいうまでもない。

なお、都市遺跡周辺の遺跡分布を検討するにあたっては、都市遺跡を中心にして半径 100km の円を描き、その内側に含まれる遺跡の数をカウントした。

【モヘンジョダロ遺跡 (図 8)】

モヘンジョダロ遺跡はインダス川の右岸に位置する都市遺跡である。これまでに数次にわたる発掘調査が実施されており、文明期～ポスト文明期を中心とする時期の文化層が確認されている (Marshall 1931; Mackay 1938; Dales and Kenoyer 1986)。ただし、ポスト文明期に関しては、ジュエカル式土器が散発的に出土しているだけであり、この時期の居住の様態については十分に明らかになっていない。また、これまでのところ先文明期の文化層は確認されていない。

半径 100km 圏内に入る遺跡は全体で 96 遺跡である。前 4 千年紀後半の段階で 14 遺跡が存在しているが、うち 12 遺跡はキルタル山脈東縁部の標高 200m 以上のところに位置している。2 遺跡は標高 100m 以下のところで 1 遺跡はモヘンジョダロの近郊に位置している。

前 3 千年紀前葉になると、57 遺跡に増加する。新規に 43 遺跡が増加しており、それらはモヘンジョダロ遺跡の東側、すなわちインダス川の左岸に立地している。特にローフリー丘陵の周辺に集中する現象が認められる。

前 3 千年紀中・後葉には 62 遺跡に増加しているが、その内訳は継続遺跡 25 遺跡、新規遺跡 37 遺跡で、廃絶遺跡が 32 遺跡存在する。また、遺跡の分布をみると、ローフリー丘陵周辺で遺跡が多いのは同じであるが、平原部でも散在的ながら広く遺跡が分布している状況が認められる。

前 2 千年紀前葉になると、6 遺跡に減少する。58 遺跡が廃絶しており、都市の衰退に連動して遺跡数が減少している可能性を示している。モヘンジョダロ遺跡で生活していた人口を周辺の遺跡が収容したわけではなく、域外へと移出した可能性がきわめて高い。

キルタル山脈の東縁部は一般的にバローチスターン地方の文化伝統に属していると考えられるが、前 3 千年紀前葉にはコート・ディジー式土器がこの地域にも分布しており (Krishna Deva and McCown 1949)、平原部との関係が強化されている状況を確認することができる。こうした状況は北のカッチー地方においても同様である (Pracchia 1985)。一方、前 3 千年紀前葉にローフリー丘陵周辺で遺跡が増加するのは、チャート資源の利用・開発が進んだ可能性を示している。文明期には各地でローフリー産チャートを用いた石刃石器が分布することとも関係していると考えてよいであろう。モヘンジョダロ遺跡における都市形成はそうした周辺地域との関係を基盤の一つとしている可能性が高い。沖積平野の開発がいつの段階から始まっているのか判断が難しいが、少なくとも文明期には沖積平野にも多くの遺跡が分布していることからみると、モヘンジョダロ遺跡の都市形成に前後して近隣の沖積平野の開発が進行した考えられる。

【ハラッパー遺跡 (図 9)】

ハラッパー遺跡はインダス川の支流であるラーヴィー川沿いに立地する遺跡である。前 4 千年紀に居住が始まり、前 2800 年頃には周壁が築かれて都市的な性格をもつ拠点集落へと発展する。文明期を通じて都市として展開するが、前 2 千年紀前葉には都市的機能を失っている可能性が高い (Kenoyer 2005; Kenoyer and Meadow 2000; Meadow and Kenoyer 1993, 1994, 1998)。

周辺ではわずかに 5 遺跡が分布する。その内訳は前 4 千年紀後半に 2 遺跡、前 3 千年紀前葉に 4 遺跡、前 3 千年紀中・後葉に 4 遺跡、前 2 千年紀前葉に 1 遺跡である。この遺跡数の少なさは耕作に伴う遺跡の破壊に起因する可能性が高く⁵⁾、遺跡数の変化を考えるには不十分である。

なお、ハラッパー遺跡とジャリールプル遺跡では前 4 千年紀後半には西のゴーマル地方に類

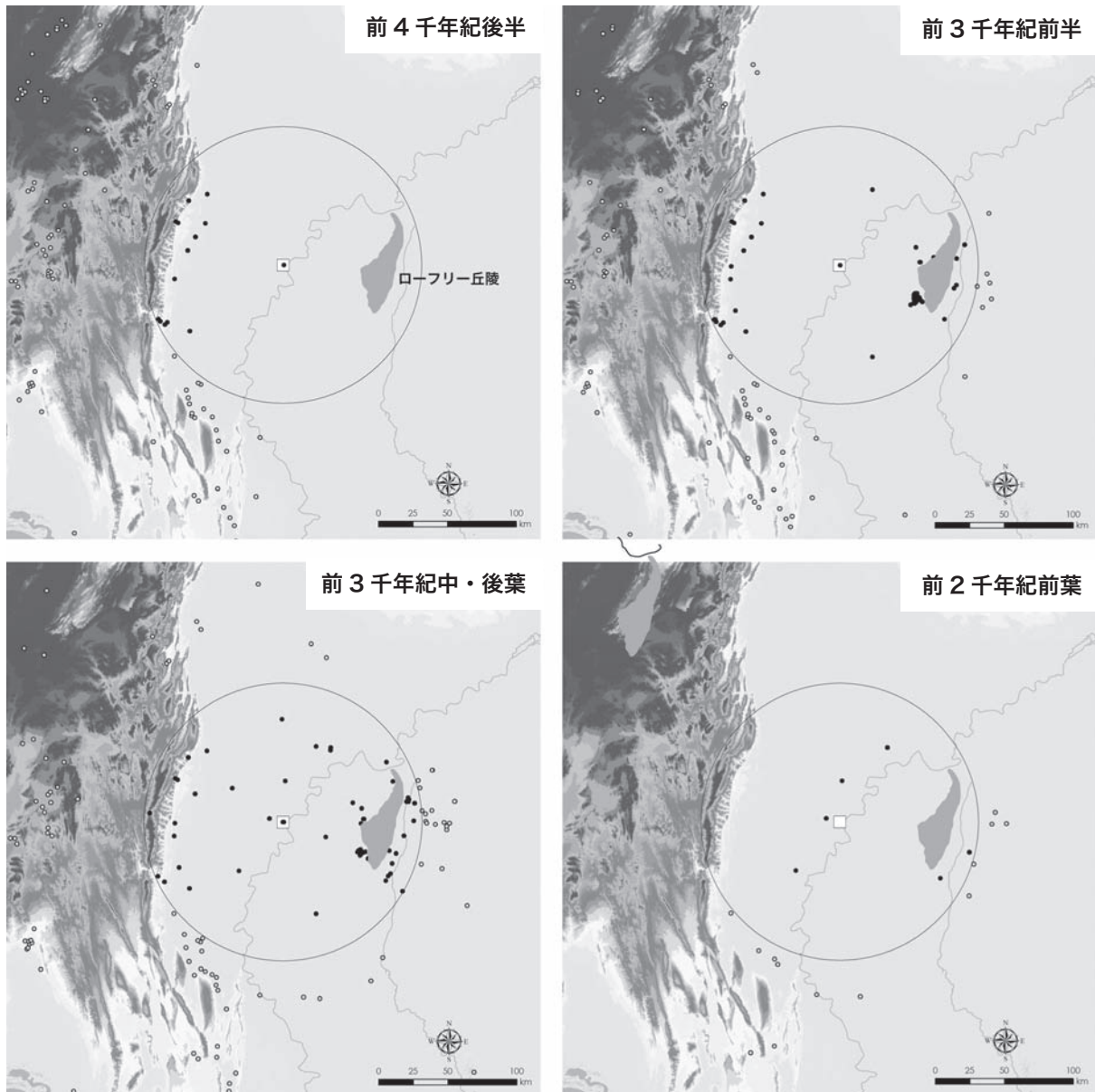


図8 モヘンジョダロ周辺（半径100km圏内）における遺跡分布

似する彩文土器が出土する（Kenoyer and Meadow 2000; Mughal 1974）。前3千年紀前半になるとコート・デージー式土器が出土するが、これもまた西のゴーマル地方のそれに類似するほか（Dani 1970-71; Durrani 1988）、北のポトワール地方でも同様の土器群が確認されている（Halim 1972）。こうした遠隔地域との関係がハラッパー遺跡の都市形成の一要因となっている可能性があるが、それが近隣地域の開発を伴うものであるのかどうかは不明である。

【ドーラーヴィーラー遺跡（図10）】

グジャラート地方西部のカッチ地方に位置する遺跡で、発掘調査によって前4千年紀後半（？）から前3千年紀前葉を経て、文明期の前3千年紀中葉から後葉には都市として発展する（Bisht 1991）。前2千年紀前葉には都市が廃絶している可能性が高い。

周辺では47遺跡が確認されている。前4千年紀後半と前3千年紀前葉の区分が明確ではないが、8遺跡ないしは9遺跡が分布する。前3千年紀中・後葉になると33遺跡に増加し、そ

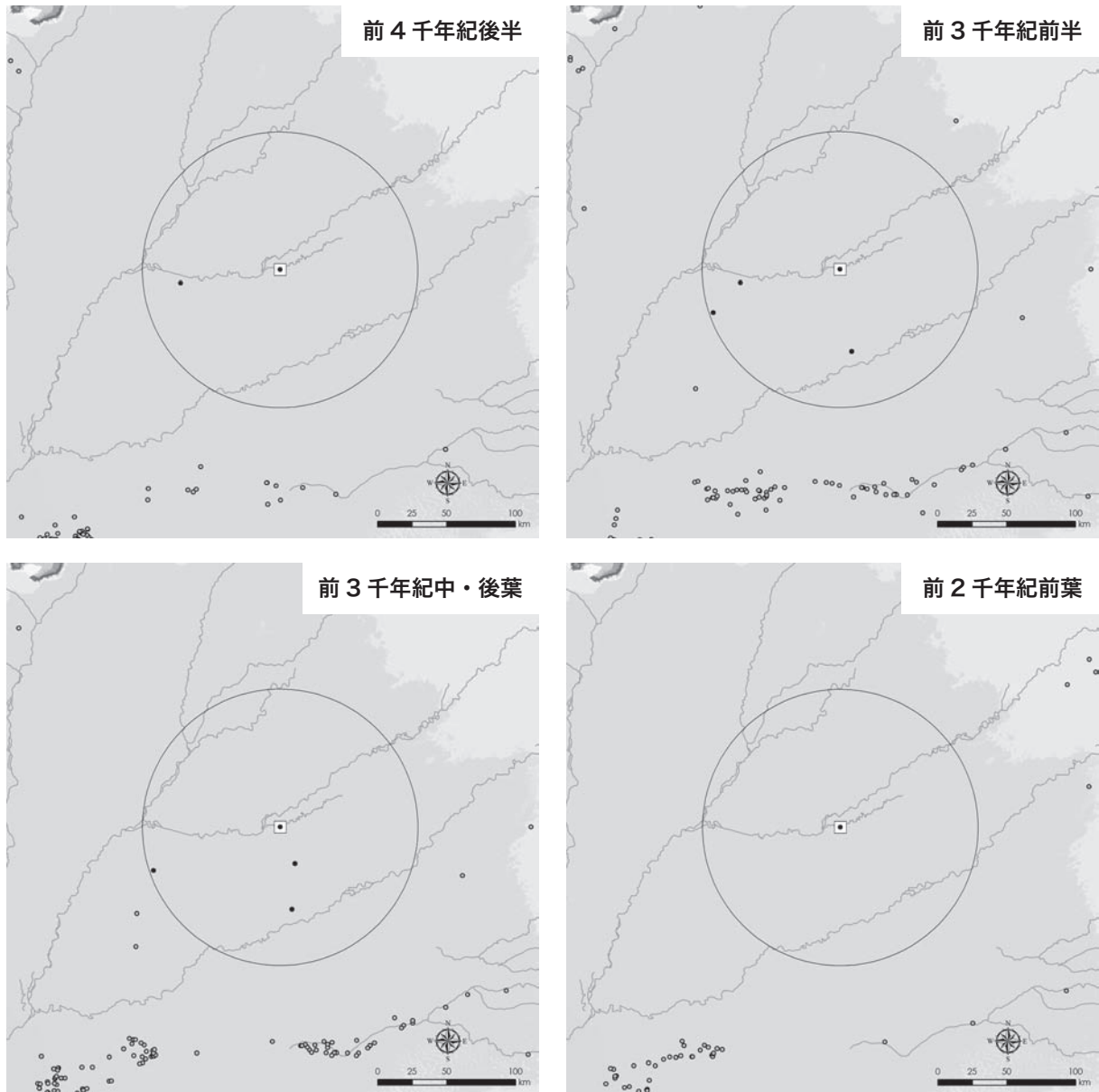


図9 ハラッパー遺跡周辺（半径100km圏内）における遺跡分布

の内訳は継続遺跡が3遺跡、新規遺跡が30遺跡であり、域外からの人口移入が推定される。前2千年紀前葉には継続遺跡2遺跡、新規遺跡8遺跡、廃絶遺跡31遺跡で、計10遺跡に減少する。廃絶遺跡の人口を継続遺跡もしくは新規遺跡が収容できたとは考えにくく、域外への移出の可能性が示される。

このように先文明期には周辺遺跡がきわめて少なく、ドーラーヴィーラー遺跡における都市形成が周辺の開発を基盤としたものかどうか判断が難しい。湿原内部の島に遺跡が立地していることも勘察すると、少なくともドーラーヴィーラー遺跡の直近で大規模な開発が進んでいたとは考えにくい。前3千年紀中・後葉に遺跡数が増加する様相はドーラーヴィーラー遺跡を核としたカッチ地方の開発が進んでいることを示すが、ドーラーヴィーラー遺跡の廃絶とともに地域全体が衰退する様子を見させている。なお、先文明期にグジャラート地方北部を中心に展開したアナルタ式土器はドーラーヴィーラー遺跡の先文明期の文化層からも出土しており、この地域の開発にアナルタ式土器に関する集団が関わっていることは想像に難くない。彼らはグ

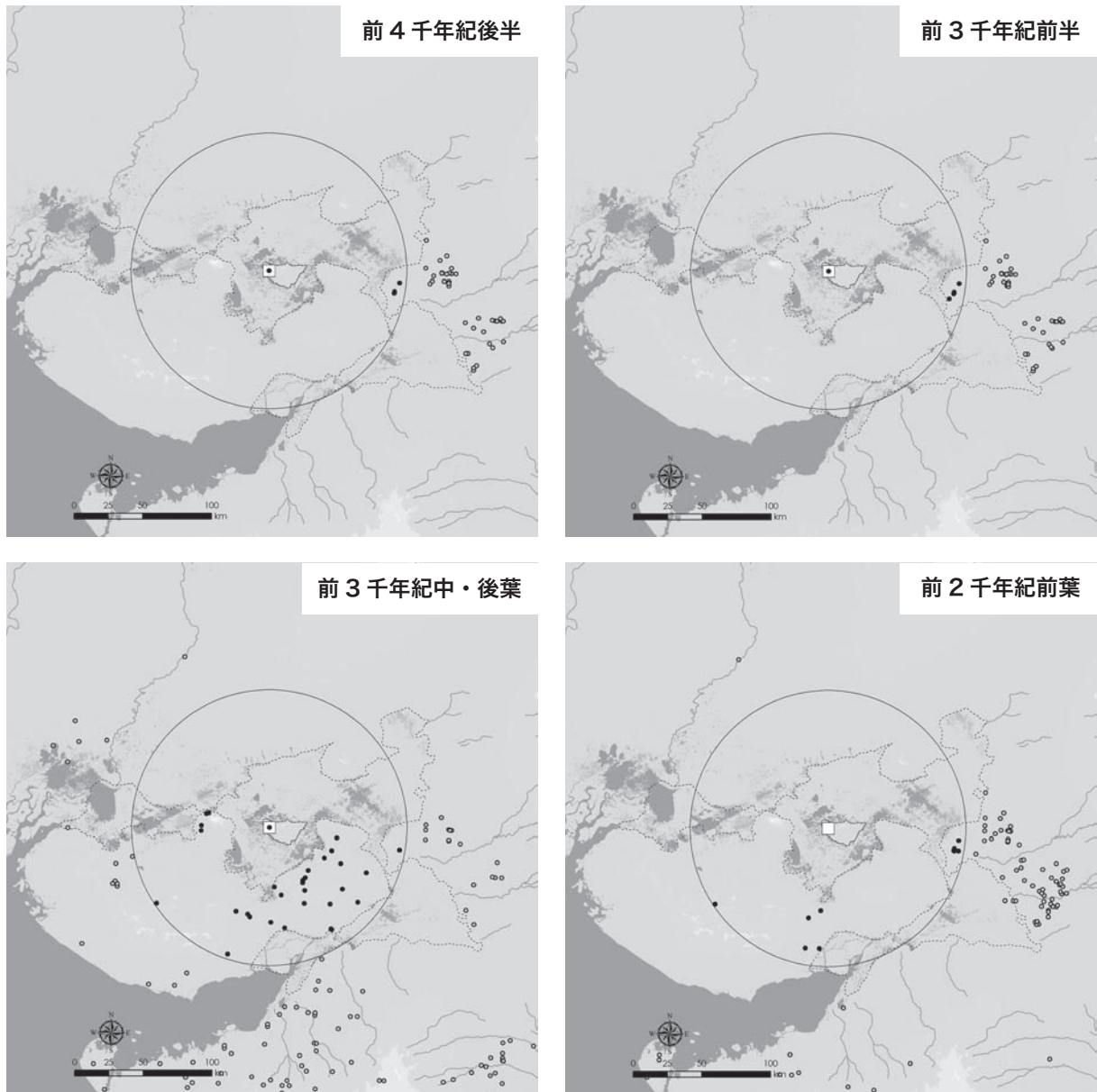


図10 ドーラーヴィーラー遺跡周辺（半径100km圏内）における遺跡分布

ジャラート地方北部からカッチ地方で産出するさまざまな石材を用いて細石刃石器群を使用していたが、それらの石材は文明期にビーズ生産に転用されるようになる。先文明期以来の在地集団がこの地域の文明期の社会に大きな役割を果たしたと考えられ、文明期におけるハラッパー文化との関係が今後の検討課題となろう。

【ラーキーガリー遺跡（図11）】

ラーキーガリー遺跡はガッガル地方のチョウタング川流域に位置する遺跡で、発掘調査によって先文明期から文明期の文化層が確認されている（Nath 1998, 1999, 2001）。十分な情報が公表されていないため、都市形成の過程を復元することは難しい状況にあるが、遅くとも文明期には都市として発達していたことは確実である。現在のところ、前2千年紀前葉の文化層は確認されていない。

周辺には1050遺跡が確認されている。前4千年紀後半には19遺跡であるが、前3千年紀に

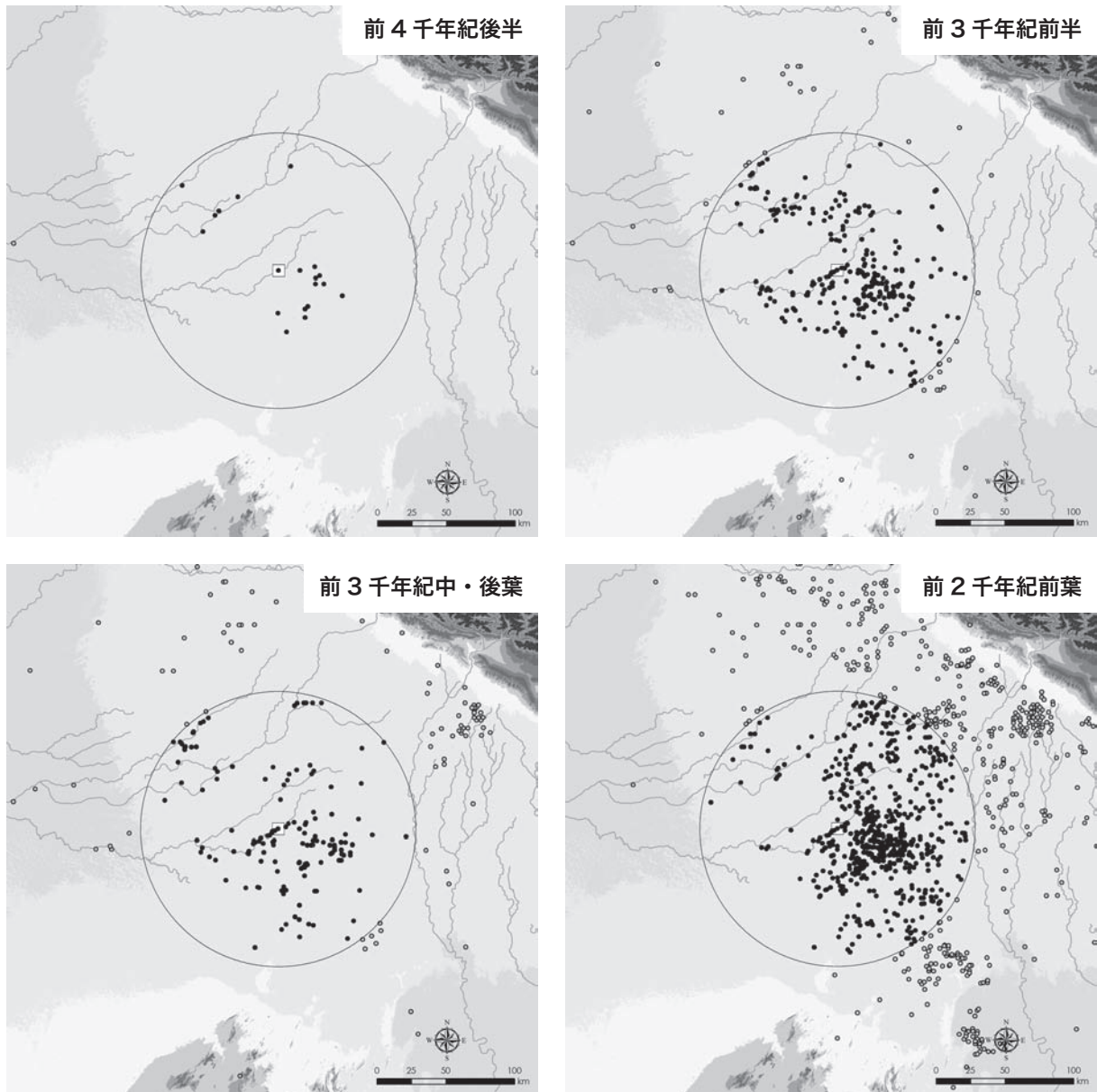


図11 ラーキーガリー遺跡周辺（半径100km圏内）における遺跡分布

入ると313遺跡に増加する。この数値は前3千年紀中・後葉の遺跡を含んでいる可能性もあり、注意する必要があるが、遺跡数が急増している可能性はきわめて高いであろう。ハラッパー文化の文化要素が確認されている遺跡は167遺跡で、先の313遺跡の一部がこの時期に編入される可能性を考慮すれば、おおむね前3千年紀前葉と同程度の遺跡数が存在すると考えてよいであろう。前2千年紀前葉になると721遺跡に増加しており、その内訳は継続遺跡が108遺跡、廃絶遺跡が59遺跡で、新規遺跡が613遺跡である。新規遺跡が圧倒的に多く、域外からの人口移入を伴っている可能性が高い。

前4千年紀後半の遺跡はいわゆるハークラー式土器を特徴としているが、西のチョーリスターン地方のハークラー式土器とは類似点とともに相違点もあり、交流の一方で在地化が生じていると考えられる。続く前3千年紀のソーティ=シースワール式土器とは共通する要素が多く、ガッガル地方ではハークラー式土器からソーティ=シースワール式土器への変化が生じている可能性が高い。前3千年紀前葉とそれ以降の時期を土器資料で分けることは難しいが、前3千

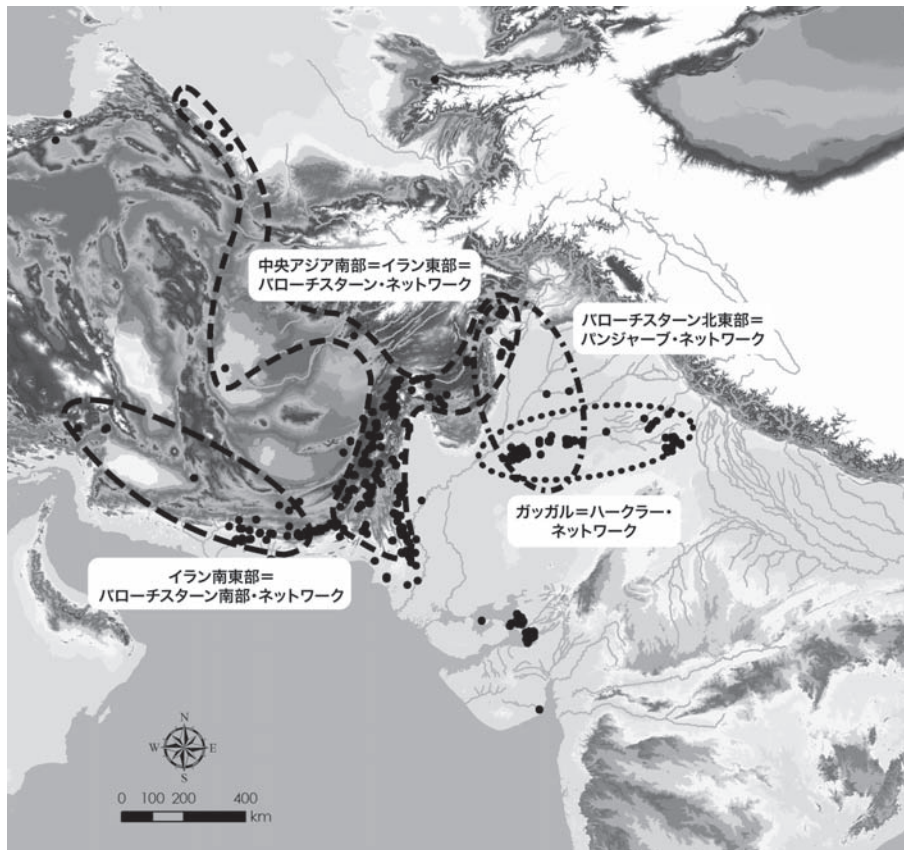


図 12 前 4 千年紀後半における交流ネットワーク

年紀前葉から前 3 千年紀中葉の文明期にかけて、ラーキーガリー遺跡における都市形成と連動して、遺跡数が増加した様子を見ることが出来る。前 2 千年紀前葉にはラーキーガリー遺跡の都市は廃絶している可能性が高いが、都市の廃絶に伴う都市住民の分散や、あるいは他地域からの人口移入が遺跡数の増加を引き起こしている可能性がある。この時期はバーラー式土器によって特徴づけられるが、文明期における在地のソーティ＝シースワール式土器とハラッパー式土器のそれぞれの要素がバーラー式土器に混在しており、本来別個の文化伝統に属していたものが融合していく現象が前 2 千年紀前葉に生じていることが推測される。地域社会の構造の変容を反映した現象と考えられ、都市の衰退や遺跡数の増加といった現象と連動している可能性がある。

7 考察

以上の分析から導き出される遺跡分布の傾向をまとめると、以下のようになる。

- 1) 前 4 千年紀後半にはパロチスタン高原およびパンジャブ地方のチョーリスターン地方で集中的な遺跡分布が認められる。ガッガル地方とグジャラート地方でも遺跡が比較的まとまって分布する。
- 2) 前 3 千年紀前葉になると、シンド地方およびガッガル地方で遺跡数が増加する。パロチ

スターン地方およびチョーリスターン地方は依然として集中的な遺跡分布が認められる。

3) 前3千年紀中・後葉になると、シンド地方、パンジャブ地方、グジャラート地方で急激な遺跡の増加が確認でき、ガッガル地方でも集中的な遺跡分布が認められる。こうした状況は都市周辺でも確認できる。バローチスターン地方でも、遺跡数は減少するものの、多くの遺跡が分布する。

5) ポスト文明期になると、バローチスターン地方、シンド地方、パンジャブ地方、グジャラート地方で顕著な遺跡数の減少が生じており、特にバローチスターン地方とシンド地方では空洞化といってよいほど劇的である。

以上の5点は文明社会の盛衰とどのように関わっているのでしょうか。

まず、前4千年紀後半においては(図12)、バローチスターン地方では西のイラン高原や中央アジア南部に共通する要素を遺物に窺うことができ(Biscione 1973)、西方との交流関係が存在したことが推定される。こうした西方との関係がバローチスターン高原における遺跡分布とどのように関係しているのか即断することはできないが、イラン高原から続く乾燥性の高原地帯という環境が広域におよぶ人の移動と交流のあり方に影響を及ぼしている可能性がある。イラン高原のそれに類似する印章がバローチスターン高原東縁部に出現するのも、こうしたバローチスターン高原とイラン高原の強い交流関係を示唆するものである。交流関係の存在は人の活発な移動・往来を示す証左であり、イラン高原からの移住がバローチスターン地方での遺跡分布の一因となっている可能性は考慮する必要がある。

一方、この時期のチョーリスターン地方の遺跡はハークラー式土器によって特徴づけられるが、類似する土器がガッガル地方にも分布しており、両地域の遺跡分布は連動したものである可能性が高い。チョーリスターン地方を含むパンジャブ地方ではバローチスターン地方との関係を示す土器も出土しており(Mughal 1974; Kenoyer and Meadow 2000)、交流関係が示唆される。しかし、それはバローチスターン地方とイラン方面との関係とは異なっており、高原部と平原部における異なる環境が、人の移動形態および規模、そして交流関係の強度に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

前3千年紀前葉のパンジャブ地方およびシンド地方の遺跡は、コート・ディジー式土器の分布域に含まれる(図13)。この土器様式はきわめて広域に展開しており、平原部を中心とする拡大志向型の地域社会、あるいは社会・文化ネットワークの形成を示唆している。遺跡数の増加はそうした広域性と関連する可能性がある。すなわち、拡大志向のもとで地域開発が促進され、それが結果として広域型のネットワークを形成するにいたったと考えられる。

一方、ガッガル地方における様相については遺跡編年の問題があり、前3千年紀前葉の段階にどの程度遺跡数が増加しているのか即断できない。ソーティ=シースワール式土器がこの地域の文化指標であるが、コート・ディジー式土器はガッガル地方ではほとんど出土しないことから、コート・ディジー式土器と並行する段階にソーティ=シースワール式土器がガッガル地方に分布していた可能性は十分にある。おそらくはパンジャブ地方やシンド地方と同様に、この時期に開発が進行しているのであろう。

バローチスターン地方中央部においては、ファイズ・ムハンマド式土器やウェット・ウェアと呼ばれる土器群やジョーブ式土偶(上杉 2008a)などが分布する(図14)。これらの遺物は分布範囲が重複することから、バローチスターン地方内部の交流関係が強化され、地域社会の

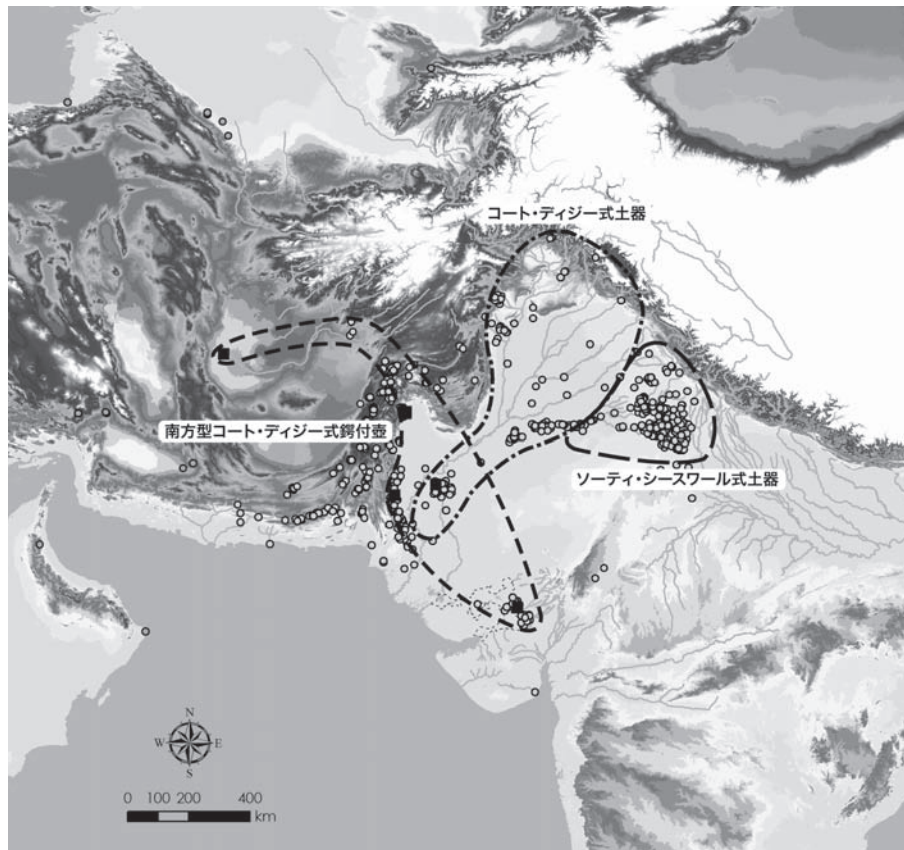


図 13 前 3 千年紀前葉における平原部を中心とする土器様式の分布

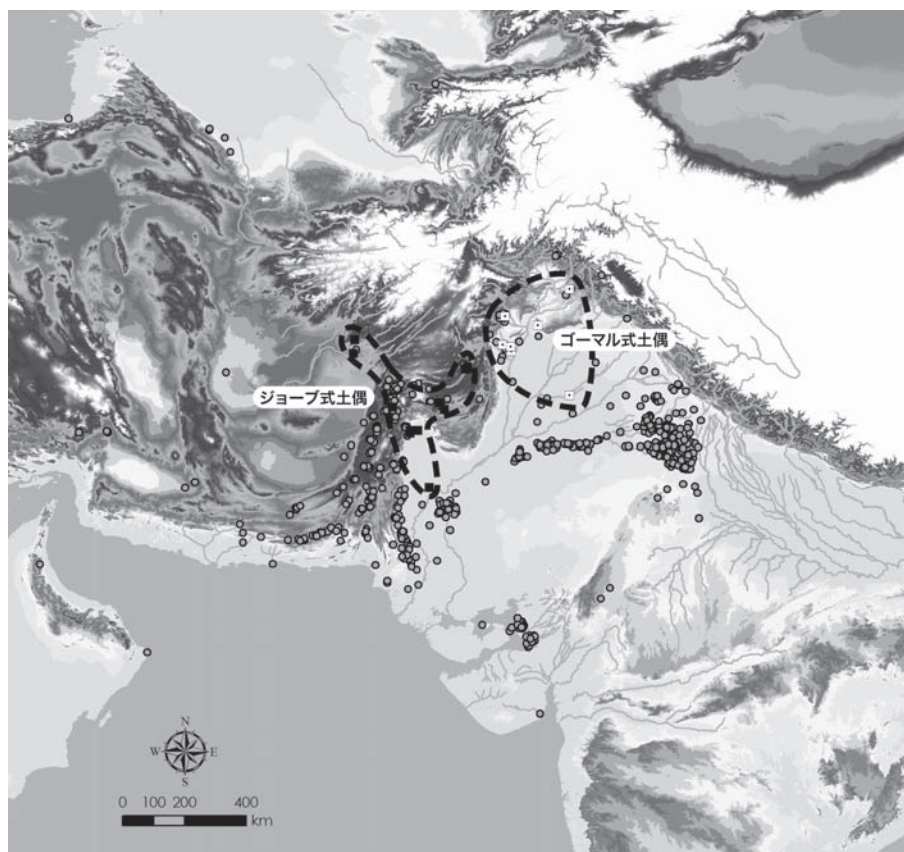


図 14 前 3 千年紀前葉における土偶様式の分布

範囲が明瞭となった状況を窺うことができる。このバローチスターン地方における交流ネットワークは西のアフガニスタン南部からイラン高原、南西のマクラーン地方にまで及んでいる。バローチスターン地方北東部のゴーマル・バンヌー地方は前4千年紀後半においてはバローチスターン地方の他地域に共通する彩文土器が分布していたが、前3千年紀前葉になると東の平原部に成立したコート・ディジー式土器が主体化する。また、ゴーマル式土偶の分布もこの地域と平原部の交流関係を明示する（図14）。このことはこの地域が平原部のネットワークに取り込まれたことを示している。

さらに前3千年紀前葉の段階において、西のゴーマル・バンヌー地方からパンジャブ地方、さらに東のガッガル地方にかけて同心円文を刻んだ印章が分布するが（図14）、これは地域内部の開発と地域を越えた交流ネットワークの形成がこの時期に進行していることを示している。

グジャラート地方では先文明期の土器編年が確立していないことから不明な点が多いが、この時期における急激な遺跡数の増加は生じていない可能性が高い。その一方で注目されるのはシンド系土器のグジャラート地方北部への流入であり、シンド地方で成立した拡大志向の強い社会との関係が窺われる。

こうしたグジャラート地方北部へのシンド系土器の流入は、単なる地域的現象ではない。前2700年頃にはシンド地方とバローチスターン地方中央部の交流関係が強化される現象が諸々の遺物の分布に推定でき、その交流ネットワークは西のヘルマンド川流域にも広がりを見せている（図13）。グジャラート地方北部におけるシンド系土器はそうした交流ネットワークの形成に連動する現象と考えられる。ゴーマル・バンヌー地方、パンジャブ地方、ガッガル地方など北部地域における交流ネットワークの形成に並行して、バローチスターン地方中央部-シンド地方-グジャラート地方という南部地域でも新たな交流ネットワークの形成が進行していたと考えられる。そして、コート・ディジー式土器に表象されるように、北部地域と南部地域をつなぐ交流ネットワークが存在したことも見逃せない。このように複数のネットワークが重層化する現象の中で、各地の地域社会においても変化が促進されたであろう（上杉2008b）。前3千年紀前葉における遺跡数の変化はこうした状況とも連動している可能性が高い。

このように、前3千年紀前葉はインダス平原部の開発が進行し、交流ネットワークの拡大が生じた時期である（上杉・小茄子川2008）。こうした状況は遺跡数の増加ともある程度一致しており、質実ともに文明社会の形成に大きく歩を進める時期と評価することができる。

前3千年紀後半は広域に及ぶ文明社会が成立・展開した時期であり（図16）、シンド地方、パンジャブ地方、グジャラート地方における顕著な遺跡増加は、都市の成立とも連動した現象と考えてよいであろう。また、バローチスターン地方でも減少しながらも遺跡数が維持されていることは、バローチスターン地方が平原部を中心とする文明社会と深く関係していることを示している。実際、ハラッパー文化の要素はバローチスターン地方にも分布しており、前4千年紀後半以来多数の遺跡が存在してきたバローチスターン地方と、前3千年紀前葉以降に大きく発展してきた平原部との関係が文明社会の基盤となっていると考えられる。

前代と比較すると、グジャラート地方における遺跡数の増加はきわめて際立っており、文明社会においてこの地域が重要性を有していたことを示している。地域外からの大規模な人口移入と分散が生じている可能性がある。装身具生産の素材の多くがこの地域に存在していることが要因の一つと考えられる。実際に装身具生産を行う遺跡がこの地域に特徴的であることはそ

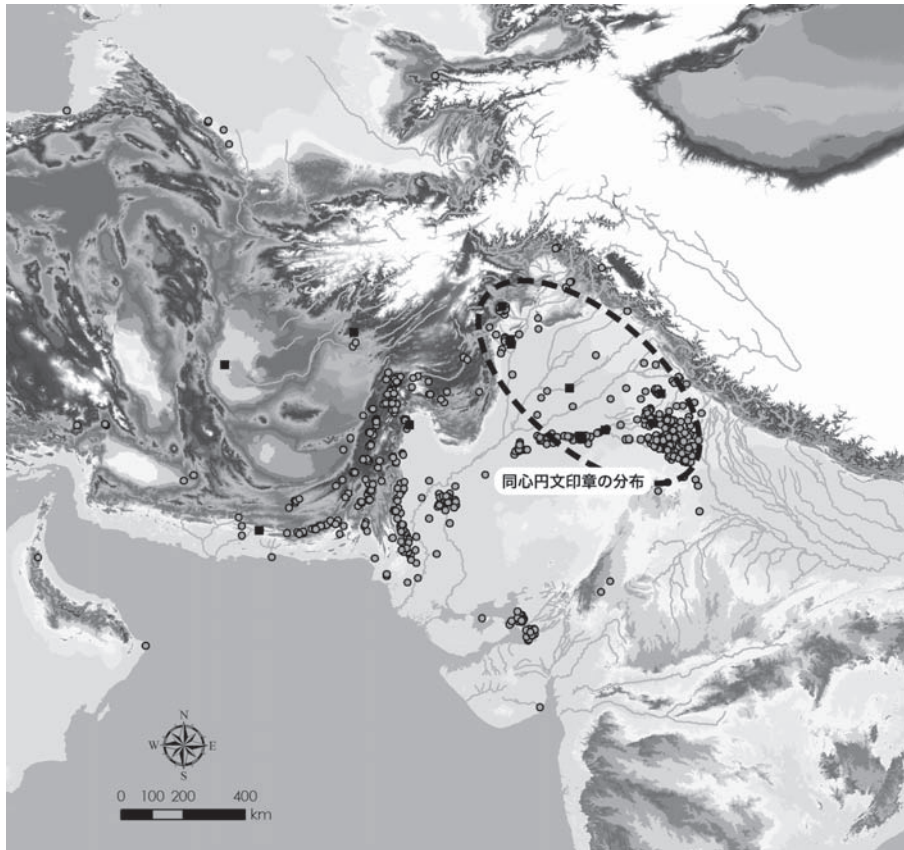


図 15 前 3 千年紀前葉における同心円文印章の分布

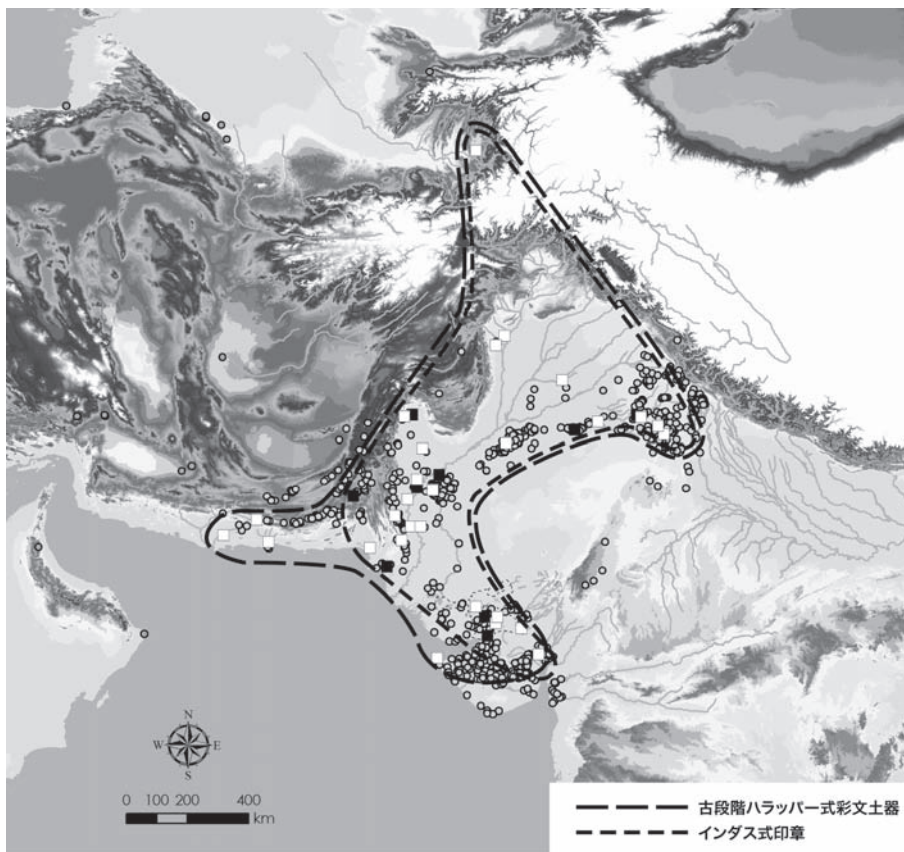


図 16 前 3 千年紀中・後葉におけるインダス式印章の分布

の証左であろう。

前2千年紀前葉には文明社会の衰退が生じるが、各地での遺跡数の減少はそれに連動する現象と判断してよいであろう。バローチスターン地方とシンド地方は減少が劇的であり、文明社会の衰退と深く関係していると考えられる。グジャラート地方での遺跡数の減少は、文明社会の衰退に伴うこの地域の重要性の低下に起因していると推定される。パンジャブ地方についてはまた別の要因を考える必要があるが、東のガッガル地方に遺跡分布の中心が移ったことと関連している可能性がある。

こうした状況の中で前2千年紀後半以降には、前半の流れを受けてガッガル地方とその東のガンガー地方が社会の中心となり、前1千年紀には都市が出現するにいたる。ガッガル地方とガンガー地方に人口が集中したことによって、地域の開発が促進され、結果として都市社会の形成につながったと考えることができる。一方、パンジャブ地方やシンド地方は再びネットワークの中心となることはなかったようである。このようにみると、インダス文明の衰退はパンジャブ地方やシンド地方に最も大きな歴史的影響を与えたとみることもできるかもしれない。

8 おわりに

本稿では先文明期からポスト文明期にかけての遺跡リストをもとに、遺跡数の推移を検討してきた。実際には、こうした分析を実施し解釈を行うにはデータセットが不十分であることは確かである。いかにデータセットをより充実したものにしていくかが、今後の最大の課題である。

一方で、現状のデータセットの分析の結果、文明社会の盛衰と連動する可能性のある現象がみられたが、これらは今後のデータセットの充実とともに検証すべき課題でもある。単に多くの遺跡が存在することが文明社会の存在を意味するわけではないが、都市の存在や特定の遺物の分布と重ね合わせたとき、前3千年紀後半における遺跡数の増加は文明社会の展開と連動した現象である可能性は大である。

同様に前2千年紀後半における各地の遺跡数の減少は文明社会の衰退と関係していることも事実であるが、逆にガッガル地方やガンガー地方での遺跡数の増加は、遺跡数が減少した地域からの人口移動を反映している可能性があり、遺跡数の増減のみをもって文明社会の盛衰を論じられるわけではないことを示している。ガッガル地方でもこの地域の都市は他地域の都市と同様に廃絶もしくは衰退していることはこの地域の遺跡数の増加の意味を考える上で重要な手掛かりとなろう。

衰退の要因は依然として不明であるが、社会の側からみれば文明社会を維持する仕組み・基盤が失われたことを示している。都市の衰退や文字の非使用化といった現象は文明社会として広域を統合するネットワークの崩壊を示しており、ネットワークの崩壊に連動して、遺跡数の増減、すなわち人口移動が生じた可能性を示唆している。

こうした広域空間を統合するネットワークの形成・崩壊過程の解明が、インダス文明社会の盛衰の解明にとって重要な鍵であり、そのなかで遺跡分布の変化は多くの手掛かりを与えてくれるものである。遺跡分布が意味するところを、分布調査の欠点を補いながら、さまざまな視

点から読み解いていくことが求められよう。

本稿をまとめるにあたって、多くの方々からご教示・示唆を得た。ガッガル地方における遺跡分布については Manmohan Kumar および V. Dangi の両氏（ともにマハリシ・ダヤーナンド大学）、パンジャブ地方については J.M. Kenoyer および R.W. Law の両氏（ともにウイスコンシン大学）、グジャラート地方については R.S. Bisht（インド政府考古局）および P. Ajithprasad（マハーラージャ・サヤジラーオ大学）の両氏、シンド地方については Q.H. Mallah 氏（シャーハ・アブドゥル・ラティーフ大学）より数々のご教示に負うところが大きい。また、GIS による分析にあたっては、中村大氏（総合地球環境学研究所）よりご指導いただいた。末筆ながらご芳名を銘記して深謝申し上げます。

【註】

- 1) この数値は、ポトワール盆地からサウラーシュトラ半島南端部、マクラーン地方からガンガー地方西部までの範囲を含むもので、アフガニスタン北部のショールトゥガイ遺跡とインド半東部のダーイマーバード遺跡を含めると、南北の距離は 2000km 近くに達する。
- 2) Joshi らの集成では、インド側の遺跡として先文明期 138 遺跡、文明期 248 遺跡、ポスト文明期 695 遺跡が挙げられている。
- 3) 例えば、(Mughal 1997) では 0.1-5ha を小村落 (small village)、5.1-10ha を大村落 (large village)、10.1-20ha を小町邑 (small town)、20.1-30ha を大町邑 (large town)、30.1-40ha を小都市 (small city)、40ha 以上を大都市 (large city) と呼ぶが、5ha 未満の遺跡でも種々の工芸品生産活動が行われるなど、地域の拠点として機能していたと考えられる遺跡があり（グジャラート地方バガーサラー遺跡など）、遺跡規模と遺跡の性格が必ずしも一致しない場合がある。
- 4) 近年における農業の機械化は遺跡の破壊を加速しており、すでになくなってしまった遺跡も多い。ただし、ある程度の遺跡数が確認されているところで、特定の時期の遺跡だけが存在しない場合、それは有意な現象と判断できるであろう。逆にある時期の遺跡数が多い場合にも同様の判断が可能であろう。
- 5) インド側のガッガル川とパキスタン側のハークラー川は同一の河川であり、現在の国境で地域区分の境界を設定することには意味がないのだが、おおよそこの辺りで土器様式の変化、すなわち前 3 千年紀前葉におけるコート・ディジー式土器とソーティ＝シースワール式土器の境界が位置することもふまえて分けた（チョーリスターン地方の土器については (Mughal 1997) を参照のこと。)
- 6) Imperial Gazetteer, vol. 22 (1908 年) に収められているシャーハプル県 (Shahpur District) の項では、約 270 ヶ所のマウンドが存在したという。この記録以後、いつの段階で遺跡の破壊が進行したのかわからないが、この中にインダス文明関連遺跡が含まれていたことは疑いのないところである。

【引用・参考文献】

- Bala, M. (1992) *Archaeology of Punjab*. Agam Kala Prakashan, Delhi.
- Biscione, R. (1973) "Dynamics of an early South Asian urbanization: the First Period of Shahr-i Sokhta and its connections with Southern Turkmenia", in N. Hammond (ed.) *South Asian Archaeology*. Duckworth, London. pp.105-118.
- Biscione, R. (1990) "The Elucive Phase 2 of Shahr-I Sokhta Sequence", in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*. IsMEO, Rome. pp.391-409.

- Bisht, R.S. (1991) Dholavira: a new horizon of the Indus Civilization. *Purātattva* 20: 71-82.
- Dales, G.F. and J.M. Kenoyer (1986) *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: The Pottery*. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Dangi, V. (2009a) Archaeology of the Ghaggar Basin: Settlement Archaeology of Meham Block, Haryana, India. *Occasional Paper 8: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.
- Dangi, V. (2009b) "Recent exploration in the Chautang Basin (Jind District, Haryana)", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 9: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.73-163.
- Dangi, V. (2010) *A Study of Proto-Historic Settlements in Upper Ghaggar Basin*. PhD dissertation submitted to Department of History, Maharshi Dayanand University, Rohtak.
- Dani, A.H. (1970-71) Excavations in the Gomal Valley. *Ancient Pakistan* 5: 1-177.
- Durrani, F.A. (1988) Excavations in the Gomal Valley: Rehman Dheri Excavation Report No.1. *Ancient Pakistan* 6: 1-232.
- Halim, M.A. (1972a) Excavations at Sarai Khola, Part I. *Pakistan Archaeology* 7: 23-89.
- Halim, M.A. (1972b) Excavations at Sarai Khola, Part I. *Pakistan Archaeology* 8: 1-112.
- Jarrige, C., J.-F. Jarrige, R.H. Meadow and G. Quivron (1995) *Mehrgarh: Field Reports 1974-1985 From Neolithic Times to the Indus Civilization*. The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan, Karachi.
- Joshi, J.P., M. Bala and J. Ram (1984) "The Indus Civilization: A Reconsideration on the Basis of Distribution Maps", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization*. Books & Books, New Delhi. pp. 511-530.
- Kenoyer, J.M. (2005) "Culture change during the Late Harappan period at Harappa: new insights on Vedic Aryan issues", in E.F. Bryant and L.L. Patton (eds.) *The Indo-Aryan Controversy: Evidence and inference in Indian history*. Routledge, London/New York. pp.21-49.
- Kenoyer, J.M. and R.H. Meadow (2000) "The Ravi Phase: A new cultural manifestation at Harappa, Pakistan", in M. Taddei and G. De Marco (ed.) *South Asian Archaeology 1997*. Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente and Istituto Universitario Orientale, Roma. pp. 55-76.
- Krishna Deva & D.E. McCown (1949) Further Exploration in Sind: 1938. *Ancient India* 5: 12-30.
- Mackay, E.J.H. (1938) *Further Excavations at Mohenjo-daro*. Archaeological Survey of India, Delhi.
- Majumdar, N.C. (1934) *Explorations in Sind*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.48. Archaeological Survey of India, Delhi.
- Mallah, Q.H. (2008a) "Recent archaeological discoveries in Sindh, Pakistan", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.27-75.
- Mallah, Q.H. (2008b) "Research report on surface and subsurface analysis of archaeological sites around the lakes of the Dubi Mirwah Desert in Sindh, Pakistan", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 4: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-81.
- Manmohan Kumar (2009) "Harappan Settlements in the Ghaggar-Ymuna Divide", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 7: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-75.
- Marshall, J.H. (1931) *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. Arthur Probsthain, London.
- Meadow, R.H. and J.M. Kenoyer (1993) Excavation at Harappa 1992 & 1993. *Pakistan Archaeology* 28: 55-107.
- Meadow, R.H. and J.M. Kenoyer (1994) "Excavation at Harappa 1993: the city walls and inscribed materials", in Asko Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Annales Academiae Scientiarum Fennicae, Helsinki. pp. 451-470.

- Meadow, R.H. and J.M. Kenoyer (1998) "Excavation at Harappa 1994-1995: new perspectives on the Indus script, craft activities and city organization", in R. Allchin and B. Allchin (eds.) *South Asian Archaeology 1995*. Oxford & IBH, New Delhi. pp. 139-172.
- Mughal, M.R. (1974) New Evidence of the Early Harappan Culture from Jalilpur, Pakistan. *Archaeology* 27(2): 106-113.
- Mughal, M.R. (1997) *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Ferozsons, Lahore.
- Nath, Amarendra (1998) Rakhigarhi: A Harappan metropolis in the Sarasvati- Drishadvati divide. *Purātattva* 28: 39-45.
- Nath, Amarendra (1999) Further excavations at Rakhigarhi. *Purātattva* 29: 46-49.
- Nath, Amarendra (2001) Rakhigarhi: 1999-2000. *Purātattva* 31: 43-46.
- Patel, A. (2008) "New Radiocarbon Determination from Loteshwar and their Implication for Understanding Holocene Settlement and Subsistence in North Gujarat and Adjoining Areas", in E.M. Raven (ed.) *South Asian Archaeology 1999*. Egbert Forsten, Goningen.
- Pracchia, S. (1985) Excavations of a Bronze Age ceramic manufacturing area at Lal Shah, Mehrgarh. *East and West* 35: 458-468.
- Possehl, G.L. (1999) *Indus Age: The Beginnings*. Oxford & IBH Publishing, New Delhi/Calcutta.
- Stein, A. (1929) *An Archaeological Tour in Waziristan and Northern Baluchistan*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.37. Archaeological Survey of India, Calcutta.
- Stein, A. (1931) *An Archaeological Tour in Gedrosia*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, No.43. Archaeological Survey of India, Calcutta.
- Teramura, H. and T. Uno (2006) Spatial Analysis of Harappan Urban Settlements. *Ancient Asia* vol.1: 73-79.
- Vats, M.S. (1933) Kotla Nihang. *Archaeological Survey of India Annual Report 1929-30*: 131-132.
- Vats, M.S. (1937) Trial Excavations at Rangpur, Limbdi State, Kathiawar. *Archaeological Survey of India Annual Report 1934-35*: 34-38.
- 上杉彰紀 (2008a) 「バローチスターン高原における人物土偶に関する覚書 – 岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて –」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第 22 巻、岡山市立オリエント美術館、1-28 頁。
- 上杉彰紀 (2008b) 「インダス文明社会の成立と展開 – 地域間交流の視点から –」『古代文化』第 60 巻第 2 号、古代学協会、111-120 頁。
- 上杉彰紀 (2009) 「ガッガル平原における先・原史文化の変遷」『環境変化とインダス文明 2008 年度成果報告書』総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト、75-102 頁。
- 上杉彰紀 (2010a) 『中洋言語・考古・人類・民俗叢書 2 インダス考古学の展望 インダス文明関連発掘遺跡集成』総合地球環境学研究所、インダス・プロジェクト。
- 上杉彰紀 (2010b) 「南アジアにおける動物土偶に関する覚書 – 岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて –」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』24、1-42 頁。
- 上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」『西アジア考古学』9、日本西アジア考古学会、101-118 頁
- 長田俊樹・寺村裕史・宇野隆夫 (2010) 「南アジア・インダス文明都市の歴史空間」『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』勉誠出版、129-158 頁。